

俳句雑誌

水 明

2025 5月号

令和七年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第五号



《今月のかな女》

時鳥女はものゝ文秘めて

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

季語の本题である「時鳥」の他に傍題として多くの文字が当てられ、その特徴のある鳴き声や、托卵などの習性を知ると、その鳥に神秘的なイメージを抱くが、古来より鶯と同様に初音を珍重する鳥と識ると詩情が湧き親近感を覚える。

掲句は、女性が大切な人からもらった手紙を、千代紙細工の函に仕舞っておくような繊細でまた微妙な心理を、かな女が自分を含めて詠んだものかと思う。時鳥の特性と相通じるものがあるような気がする。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

手に余る天金の書や春寒し

十倉和子

季音月

三月や母の形見の解き衣

森川義子

季音花

伸びやかに仮設校舎の卒業歌

石川理恵

水明集

うりずんや「十九の春」の流れくる

清水桂子

鼓笛集

話好きな僧に道問ふ春の雪

菅原真理

山紫集

薄氷の水にならむとする光

石川理恵

水 明

令和 7 年
5 月 号

六 賞 発 表

令和七年 水 明 賞
令和七年 季 音 賞
令和七年 かな女賞
令和七年 鼓笛賞・山紫賞
令和七年 新珠賞
審査経過 新珠賞審査経過
新季音同人発表表

季音「花」(同人作品)

石川理恵 染谷風子
渋谷さいち ほか

季音「月」(同人作品)

森川義子 松井由紀子
梅澤佐江 ほか

季音「雪」(同人作品)

十倉和子 鳥羽和風
永野史代 ほか

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞
ゆずり 葉 季音月評

染谷風子
檜鼻ことは

花の咲く音を(近詠)
春の別れ(近詠)
ときめきの春(作品)

網野月を
山中みどり
山本鬼之介

今月のかな女
今月の巻頭句



『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

俳誌望見

句集喝采

水明創刊九十五周年記念特別作品募集

全国大会のお知らせ・兼題句募集

後藤よしみ

網野月を

梅澤輝翠

菅原卓郎

水明集

清水桂子
小林京子

菅原真理
ほか

作品鑑賞

水琴窟（水明集三月号鑑賞）

鼓笛集

山紫集

春の吟行会の記

水明例会報・各地句会報

夏行のご案内

風声・発展基金御礼

後記

山本鬼之介
池田雅夫

青木鶴城

70・73

78

79

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

ときめきの春

山本鬼之介

填め終ふる小鉤七枚春の雪

春雷に念を押さるる戻り道

五つ紋行き交ふ道や大石忌

襟元にときめき秘めて春の服

佳き町本所桜の道を影二つ

春興や劇中劇に蝶が舞ふ

二胡に添ふ猛き尺八別れ霜

春闇に溶け合ふ地獄極楽図

春の訣れ

山中みどり

料峭や 柩を送る 木遣歌
 柩に置く 祭伴 天春の雪
 春雷を君の 訣れと思ひけり
 春雷が伴つて きし 牡丹雪
 花冷えや 壺に納まる 君を抱く
 春愁や 物言ひ たげな 遺影の 眼
 潮止る 大川 漂ふ 百合 鷗

二十四歳と二十一歳で結婚をして今年で六十五年。夫との別れは突然でした。夫の両親を九十七歳と九十三歳で穏やかに家で看取った事が自分達の宝物と思っていたので、夫の唐突な死は何とも遣る瀬無い気がします。

早咲きの桜に名残り雪が舞う三月五日、祭り仲間が揃いの紺紬の伴天で、鳶頭の朗々たる木遣り節と手締めを一本。白い桐の柩を霊柩車迄運んでくれました。お酒は全く飲めない人でしたが、家族で信州上高地に出かけた折に名物の山葡萄ジュースの杯を掲げている写真があり、そのいたずらっ子のような眼差しが、いいじらしいと子や孫達を選び遺影となりました。さりげない気配りや親切がいかにも粋な人でした。江戸の風が残るこの町で家族や近隣の友人に囲まれた幸せな晩年を一ありがとう！と、とびきりの笑顔で閉じて逝きました。

花の咲く音を

網野 月を

かな女とは一重樅の白さかな
野梅立つ俳兄の徳至高なあり
アーモンド咲けば澄子の誕生日
桃の花李白の粋を旨とする
らうばいを好きな人なり性淡し
花は葉に叱つて欲しき師を恋す
波音を遠く聞くように花咲く音

このところ蕾がひらく音、花の咲く音を聞くような気がしてならない。それは春先の音であり、その音を見つけることは季節を感じることである。その音は極く小さな音なのであるが、耳を澄ませば遠くの波音のよう聞こえてくるのである。その音はやがて人の声となり、嘗て私を導いてくださった恩師や俳兄、俳姉のお声となる。正俊さん、高忠さん、紫黄先生、膳一郎さん、城子さん、静二さん、美美さん、……。幾人もの声が私の背中を押してくれている。励ましてくれ、また慰めてくれる。心を澄ましてさえ居れば、花の咲く音は絶え間なく、いつ迄も聞こえてくる。

雪 嶺

● 季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇パイプオルガン（二月号）

大村節代

足早に集ひ来る人冬の服
冬着さまざま全身耳の三十分
オルガンの響く余韻や冬日和
パイプオルガン残りし舞台冬ぬくし
音のシャワー消え冬の町へと人も消ゆ
冬日差しステンドグラスに神宿る
教会堂のリードオルガン冬のこゑ

パイプオルガンに陶醉し、教会のステンドグラスに神を想った冬日の連作七句である。一句目、上五「足早に」に聴衆の逸る気持を表し、洋装を表す「冬の服」でスピード感を出している。二句目、季語「冬着」は俳句では和装を意味するが「冬着さまざま」とあるので特にそれに捕らわれることはない。耳に焦点を当てた中七は聴衆の心をよく描いている。三句目、オルガンの余韻の残る心境を季語「冬日和」に託した。四句目、下五の季語「冬ぬくし」はパイプオルガンの演奏に酔い痴れた会場の雰囲気の特徴である。次に隣接した霊南坂教会を詠む。ちなみに同教会は山口百恵と三浦友和が結婚式を挙げた教会だ。六句目、同教会の有名かつ巨大なステンドグラスを前に神の存在を想起。七句目、教会から漏れ来るオルガンを「冬のこゑ」と形容。平易な言葉でフレーズを作り、それにより確かな季語を幹旋した冬日詠七句である。

◇竹の秋（二月号）

菊池ひろこ

雪あかり音源となる砂時計
落葉とぶ天文台の闇広し
大枝を揺らす聖夜のヒマラヤ杉
寝ころべば雲の近さの冬芝生
春の闇砂利軋ませて駐車せり
暖色の路面電車の来る臙
湯の音も香も昭和なり竹の秋

一句目、砂時計は、決まった事柄を一定時間に限定するために使われる。ここはキッチンタイマーか。室内に差し込む雪あかりの外光が冬日の静寂を作り出す。二句目、天文台は望遠鏡で宇宙の闇を観測する。下五の闇は幾億光年先の星座を包み闇である。冬の夜空を見上げる作者の足元を落葉が舞っている。大と小、遠と近の取合せである。四句目、啄木の「不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」を彷彿させ作者の若々しい精神に感服。五句目、「砂利軋ませて駐車」したのは何処か。上五の「春の闇」と照応して読み手に官能的なイメージを作らせる。六句目、暖色の路面電車は荒川線か。暖色は見る者に暖かさを感じさせる。「臙」と響き合ひ春の夜の情感を醸し出す。七句目、竹は、春地中の筍を育てるために一時的に葉が衰える。これが「竹の秋」である。作者は昭和時代の子育ての想いを季語に託している。

◇春を待つ（三月号）

石山かつ子

侘助の白の誇りや花数多
入口にはせをの句碑や冬うらら
甘酒のほのかな句ひ春近し
三椀の毬を作つてゐる途中
梅一輪母子でうたふ童唄
ひとかたまりに薺・清白風の中
紅梅の白梅の庭人を待つ

一句目、「侘助」は椿に似た小ぶりの花であり、角川俳句大歳時記に「椿よりも全体に簡素なつくりで気品があり、その名とともに茶人に好まれる」と解説されている。その花の白さに焦点をあて、その品格を詠み上げた句。二句目、芭蕉は仮名では「はせう」だが本人は「はせを」と自署した。編集部員として仮名遣いのチェックに神経を使っている作者の問題提起の句か。三句目、甘酒は夏の季語であるがここでは冬の暖かい飲み物として普通名詞として用いている。甘酒のほっとする香りに「春近し」を実感している。五句目、若い母親と幼児の親子で唄う童唄と「梅一輪」の取合せ。「春が来た」や「めだかの学校」は文部省唱歌でこの場には合わない「童唄」なら古くから子供達の間で歌い継がれて来た遊び唄であろう。未来ある幼児の明るい歌声と春到来を告げる「梅一輪」を取合せた生命讃歌の句である。七句目、旧家の庭であろう。古木の美事な紅梅、白梅が馥郁とした香を漂わせている。今年も多数の観梅客との談笑が待ち遠しい。いづれも観察の効いた写生の中に作者の顔と心の見える七句である。

◇句の道（三月号）

鈴木康世

寂寥の庭に彩り実千両
見慣れたる校舎の屋根の初茜
句の道を続けてゆけと初電話
平和・愛・絆の文字を筆始め
読初や富士山噴火に入り込む
穏やかな晴れの続きて小正月
手鞠唄聞こゆ公園夕間暮れ

一句目、冬の庭は寒々しい。作者はそれを「寂寥」という漢語ですっきりと表現している。色の少ない庭に赤い実の千両が色を添えている。春になれば小鳥達が赤い実を目当てに飛んで来る。作者のご自宅の実景と思う。三句目、初電話の相手は主宰か句友か。今年も良句が沢山出来そうだ。四句目、平和・愛・絆いづれも近年失われつつあるものだ。ウクライナ、ガザ然り。夫婦の、そして家族の愛と絆が失われ、それを報じる新聞を読むたびに胸と心が痛む。作者は世界の平和と人間相互の愛の復活を願い力強く筆を運ぶ。五句目、作者の読初は新井白石の『折たく柴の記』か。同書の宝永四年十一月二十三日の条に「よべ地震ひ、此日の午前雷の聲す。家を出るに及びて、雪のふり下るがごとくなるをよく見るに、白灰の下れる也」とある。江戸にも雪の如く火山灰が降ったのである。現在もその危険性が叫ばれている。七句目、中七の中間に切れのある二句一章の句か。冬の夕べは体が冷えて人の気持を暗くする。そこへどこか物悲しい手鞠唄が聞こえて来る。正月の中の寂寥感だ。作者の益々のご健吟を希う。

ゆずり葉

◆季音三月

檜 鼻 ことは

一灯を残す霜夜の無人駅

石井喜恵

私の住む若狭地方の生活路線である小浜線、かつてはどの駅にも数名の駅員さんと駅長がいました。現在はほとんどの駅が無人駅となり全国有数の赤字路線となっていました。寂しい限りではありますが、それでも、昼間はのどかな田園風景が駅舎のまわりにひろがり、のんびりと心を遊ばせることができます。反対に夜に降り立つ無人駅は寂しい限り。句に詠まれているように、しんしんとした寒さがつのる霜の夜であれば、尚更のこと。静けさと寒さの中、無人駅の一灯が微かな明るさを感じさせる一方で、そのわずかな光は、寂しさと孤独感を伝えているようでもあります。

小松菜は江戸の生まれと胸をはり

原田秀子

日常の食卓でいただくことの多い小松菜の旬は冬。江戸生まれの措辞に興味がわき、少し調べてみました。

八代將軍徳川吉宗が鷹狩りに訪れた際に食したすまし汁がとてもお気に入りになり、すまし汁に入れられていた青菜が小松川村の産というところから、村の名にちなんで「小松菜」と名付けられたという逸話があることを知りました。

「小松菜は江戸の生まれと胸をはり」と聞くと、まるで小松菜そのものが江戸時代の歴史を背負い、その存在感を堂々と示しているかのようです。今も変わらず多くのご家庭で食されている小松菜は、由緒正しき江戸っ子だったのですね。小気味よい句のリズムが江戸弁を彷彿とさせる一句です。

復興に寄り添ふ誓ひ年新た

丸山マシミ

能登半島地震が起きたのは昨年のお正月のことでした。今年の三月で、東日本大震災が起きてから十四年の歳月がたちます。他にも平成七年の一月には阪神・淡路大震災、平成十六年十月に新潟県中越地震、平成二十三年四月に熊本地震と大規模な地震が全国各地に起こり、甚大な被害を及ぼして

います。やっと復興が進み始めた奥能登を豪雨が襲ったのは昨年の九月。自然の脅威にあらがうことはできず、被害を受けた方々のことを思うと胸が痛みます。

句の「復興に寄り添ふ誓ひ」の措辞からは、単に支援するということだけではなく、共に歩むという作者のあたたかい気持ち伝わってきます。復興は被害を受けた地域に住む人たちだけではなく、多くの人が共に取り組むべきものであるというメッセージでもありましょう。まだまだ多くの労力と時間が必要と思われませんが、復興に寄り添おうとする誓いを新年という新しい年に重ねることで、明るい希望と力強さを感じた一句です。

降れば忌み降らねば恋し春時雨

池田雅夫

秋から冬にかけて降る雨は冷たく、降ったり止んだりを繰り返す時雨には閉口するばかりですが、同じ時雨でも春の時雨は多少なりともあたたかく、明るさと艶やかさを感じる人もいらつしやるのではないかと思います。それでも、降ったり止んだりの雨には、心を弄ばれているようで何とも面はゆいことです。

人との付き合ひも同じで、声を掛けられれば煩わしいが、声を掛けなければ、それはそれで寂しい思いがいたします。人の心の機微とは本当に複雑なもので、如何ともしがたいものだなあと思うことが時々あります。

石路の咲く路地も生家もひつそりと

下川光子

石路は、明るい日差しがあたる場所よりも、どちらかというと半日蔭の湿ったところに花を咲かせるようです。それでいて、光沢のある明るい黄色の花は存在感があり、辺りを華やかにしてくれます。下五の「ひつそりと」の言葉が、場所や記憶の変化に対する作者の心情を表しているように思えます。静かな路地に咲く石路の花の美しさとともに、過去を懐かしむ作者の心情と切なささがさりげなく伝わってきます。

城跡に石垣みごとと冬日和

野村美子

日本各地に残る名城数多、天守が残る城もありますが、石垣だけが残る城跡もあります。作者が佇まれている城跡はどこなのか。いずれにしろ「城跡に石垣みごと」という措辞から、過ぎ去った時代の面影や、歴史の重みが伝わってきます。「みごと」の一語が、長い時間の経過を超えた石垣の力強さ、美しさを引き立て、無言のうちにその存在を際立たせています。過去の栄華も今は昔、時の流れとともに失われたものがある中で、石垣だけは堂々とその姿を保っています。冬の穏やかな日差しに包まれた城跡に佇み、作者は、過去と現在、自然と人の営みが交錯する一瞬を感じていられたのではないのでしょうか。

季音雪



天金の書 十倉和子

手に余る天金の書や春寒し
 啓蟄や金箔のこる馬具出土
 搦手に反る野面積牡丹の芽
 泥絵具の罅を嘆かふ涅槃寺
 引鳥や釣灯笼に灯の入りぬ

散る桜 鳥羽和風

水脈を胸に手繰りて鳥帰る
 移る日の悲喜こもごもを花筏
 鯛跳ねて鱗飛び散る花の塵
 あんなことこんなことあり桜散る
 行く春や質屋に坐る招き猫

酒 中 花 永 野 史 代

根岸の路地をひつそりと行く春時雨
小浜三丁町寄り添ひ歩く春時雨
島椿あんこの胸を灯しをり
白極め白の闇なる白椿
酒中花と言ふ椿咲く嬉しさよ

字 余 り 星 野 和 葉

別れより未来見据うる卒業歌
卒業す明日から呼ばむ親方と
ピッケル使ひし昔も今や春の山
字余りのこれも又よし山笑ふ
木の芽和今宵の客は辛口ぞ

身 の 丈 町 野 広 子

身の丈に生きて田楽味噌作る
絶妙な田楽味噌の焦げ具合
春しぐれ小さき門灯消す朝
最終走のドクタイエロー春しぐれ
たんぽぽやたうたう出来た逆上り

芹 を つ む 茂 木 和 子

海恋ふる目刺の涙垣間見る
七輪にこだはる男目刺焼く
減反の畦道に摘む田芹かな
献立の一品芹の胡麻よごし
芹つみて指紋のひかり失へり

春 朧 森 本 早 苗

ミモザの似合ふ街並 網 野 月 を

夢二画の美女のため息春朧
板台に昼網でんと桜鯛
うぐひすの初音遺影と耳澄ます
思ふ日や今年は固き枝垂れ梅
送辞読む昂ぶり今も風光る

春 の 虹 山 中 みどり

江戸文字 石 井 喜 恵

初虹や武蔵野に君葬る日
家紋入りの木桶に満たす春の水
しらじらと明るき墓苑若緑
春陽さす墓石に行年九十歳
繋づ掌の無きが空しく春の虹

春疾風揺るる江戸文字幟旗
うぐひす餅間口の狭き老舗かな
風光るペットボトルを挿すリュック
野遊びやかがやくばかり泥の足
マジシャンの手の内にある花の種

春がすみ 井上燈女

葉の舞妓 大橋廸代

点滴につながれてゐる四月馬鹿
雨に伏し陽に立ちたんぽぽ風まかせ
一望の秩父連山春がすみ
ATにつながれてゐる春愁
羊の毛刈りし牧夫の自慢顔

水馴れ棹花嫁のせて濠うらら
春鮎釣なかの一人は女装なり
聖書よりしをりの舞妓解く春夜
朱の多き生原稿や三鬼の忌
声明に和するは籠の雀の子

肩 車 石山かつ子

山 上 湖 大村節代

三月の野原へ高き肩車
三月の雪折れんばかりに竹の幹
春耕の父の自慢の野球帽
淑やかな老妓の舞や大石忌
廊渡る衣擦れの音大石忌

目刺食み内緒の話酒旨し
串抜けばこれぞ目刺のデスマスク
春の鴨静かに暮るる山上湖
小石積む無縁仏に春の雪
野水仙に長短のあり岬馬

弥 生 小倉 倭子

雪 時 雨 菊池 ひろこ

ひとり居の樂あり苦あり春の雪
三月十日いつ個の卵に黄身ふたつ
足が癒る三月十日の床の中
三月十日逃げるが勝ちの誕生日
得恋も失恋もなく幾重の春

雪時雨遠く陽あたる海の面
雪時雨紅茶を置けば翳る卓
冬の梅どの坂道をのぼらむか
両側のポケット深し春の土
春の土そこに在りしかレアアース

花 冷 え 栢尾 さく子

春 景 五明 昇

三寒四温日暮は人の恋しくて
花冷えやぜんざいの箸短かすぎ
少々のグラスにワイン雛祭
花の蜜吸ひにくる鳥雪催
鶯の声整はぬ藪の朝

野を焼きて大利根毫もたぢろがず
べか船を舫ふ川縁風光る
荒城や木の芽怒濤の外郭
活断層起こさぬやうに春の雷
仲見世の人波崩す春時雨

張子のべこ

境

延昭

木の芽時

鈴木康世

首を振る張子のべこや風光る
三月の土手で奏づるハーモニカ
朝寝して夢の名句を取り逃がす
盆地を奔る球磨の急流上り鮎
春雷にお針の妻の眼が泳ぐ

泰然と芽吹きのときを大櫓
思ひ出の続きを歩く木の芽時
これがあのなんじやもんじやの木の芽かな
逞しき峽の子と会ふ木の芽道
鐘撞堂囲む銀杏の芽吹きかな

春の足音

島津初花

若布干し緑さながら若狭湾
瑠璃色の零るる瞳や卒園児
春光や木彫の像は笑み浮べ
春の野へ版画の馬と少年と
春の野や肌の触覚満たさるる

☆

☆

季音月

黄水仙

森川義子

百咲きて百の明るさ黄水仙
奇景なる瀬戸の小島の桃の花
三月や母の形見の解き衣
三月や送る機影の夕あかり
春雨や久しき烏賊の糸づくり

破れ靴

松井由紀子

月の無き真夜をひそかに二月尽
スカイツリーの纏ふ紫春の燭
「道行」の余情も舞ふや春の雪
抽象展出で春日の街へ紛れけり
踏青や呼吸の合ひたる破れ靴

水の春

梅澤佐江

抜きし野菜の根に匂ひ立つ春の土
三月の光の欠片飛ぶ鳥よ
春の雷ささめくやうに去りゆきぬ
切り岸に揺るる一叢黄水仙
泥大島に母の面影水の春

鼓草

松宮保人

薄氷や田に刈株の頭出す
薄氷を踵で割るや登校児
蛤の殻に彩あり捨て難し
牛肥ゆる山の牧場や鼓草
蒲公英の絮や若狭に古墳群

春の水

大場順子

木の芽張る水ほぐしゆく水車
樺細工木の芽艶めく角館
あふれんとして春水の光り合ふ
杭あれば杭に小躍り春の水
言霊の幸ふ国に住みて春

弥生の空

池田雅夫

重たげな弥生の空を手計りす
駘蕩と桜の堤人いきれ
ここへ来て恐るに足らず忘れ霜
清明や真一文字に飛行機雲
墨蹟の力まかせに春惜しむ

名科白

丸山マズミ

砂に描きし絵文字を攫ふ春の波
調教の人馬一体風光る
春の宵「弁天小僧」の名科白
江戸情緒残る朱の橋春時雨
春時雨老幹ゆるぶ一の宮

城下の灯

荒井俱子

春時雨潤みそめたる城下の灯
恋猫に一瞥投ぐる去勢猫
十人に十の進路や卒業す
点描のやうな芽吹きや斜面林
出棺す折しもひびく春の雷

赤も白も

正木萬蝶

鼻梁美し天領の雛の気位
通小町の足跡訪ふも春の土
赤い椿を宥むる白い椿かな
赤い椿の気をいただきぬ深呼吸
菜園のまだ覚めやらぬ春の土

春北風

川崎道子

銅像はみな胸を張り春北風
引鳥や銃口見えぬ覗き穴
羽根をひろぐる孔雀を待ちぬ春の昼
名刹に飼はれし孔雀羽根ひろぐ
春風と共に入りたる自動ドア

津浪遺構

近藤徹平

三月や津浪遺構の擬木松
踏青や行方の読めぬゴム飛行機
春日和鯛焼くばる草野球
名にし負ふ討入り蕎麦よ大石忌
舞妓ふと赤穂訛に大石忌

踏 青

大塚 茂子

何か身に満ちくる力青き踏む
盆地いまぐるりさみどり春の山
使ひ良き母の播粉木木の芽合
笛失せしひひなの指の無聊かな
一病を持つ身となりて母子草

春 浅 し

内田 恵子

薔薇の芽やまづ結末を読みはじむ
原色で描く自画像春浅し
とろとろの半熟卵朝寝して
颯爽と短き髪に余寒なほ
書きはじめ終活ノート名草の芽

春 の 星

上戸 千津子

急ぐ帰路潤んで見ゆる春の星
去り難し笛の音流るる雛まつり
春暁に騒ぐ足音何あらむ
目刺届きあの古里の煙あく
老ゆるほどに夢は故郷へ春の潮

溜 息

福田 千春

沈丁の白の香りや診療所
溜息は悟られず吐き沈丁花
竹林の闇をいや増す落椿
スパイクに溜めて帰りぬ春の土
顔を出す命つつみて春の土

発 光

野口 和子

豆腐屋の大屋根春へ煙吐く
捨て難き母の着物に春の風
ふうふうと煮込みうどんに雪催ひ
麗らかや増えゆく移住山の町
春の霜大地の息に発光す

春 の 星

井上 玲子

秩父嶺のかなた春星かぎりなし
天空にロマン育む春の星
春の雷花壇に目覚め促せり
春雷のこだまのわたる那須の湖
網打てば波紋広がる春の湖

亀 鳴く

熊倉 千重子

春浅し色留袖の背に家紋
山火事やはや鎮まれと亀の鳴く
押し黙るかつての置屋春の星
度忘れ同志話つづかず山笑ふ
料亭の女将すすむる木の芽和

風 光る

檜鼻 ことは

立春や句帳に記す丸印
頬杖の隅のテーブル猫の恋
風光る回転木馬の少女たち
過疎の村されどされども鳥の恋
何時になく寡黙な少女初桜

母 子 草

原田 秀子

山神も相好崩し春の山
産剃の光る産毛や母子草
雪形に豊凶占ふ白馬岳
啓蟄や腐葉土の山活気付く
青き踏む赤きサイロの見ゆる丘

黙して語る

日高 道を

末黒野やひとすぢ残る神の道
料峭や年輪は黙して語る
AIに読めぬ領域冬薔薇
寒月や一人では喧嘩にならぬ
恋すれば松こそあはれ春の水

春の 宵

飛永 鼓

柔らかな返事してをり春の宵
気負ひなど少しも無くて春の宵
迂回路は忘れ得ぬ道木の芽時
出番待つ畑の道具や木の芽風
大仰に陽を貪りぬ露の臺

春

青木 鶴城

諍ひに不毛の理屈春の泥
紛争の涸らす涙や飛花落花
鳥帰る抑留の地の水尾の果
独裁の怖さ知らずや鳥帰る
不合理の是となる今や春の闇

春の雪 松山清子

春の景はつきりさせむと眼鏡買ふ
病院の予約日なのよ春の雪
大股のスニーカー跡春の雪
はるばると来て息を呑む滝桜
囀りの高まり呼応宮の杜

梅の花 西浦千枝子

春風邪癒え久久に打つ電算機
ばば様の小言のふえて入彼岸
咬まれてもにくめぬ愛犬梅の花
シルバーカー足早に去る梅林
亡き人の記憶ふつつお中日

特集 俳句における〈実感〉の表現力

特別企画 円熟の句境——長寿俳人二十名競詠

巻頭作品10句

岸原清行・池田澄子・尾池和夫
福神規子・中原道夫・稲畑廣太郎
宇野恭子・山西雅子

俳壇

6月号

5月14日発売
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
堀切 実

八木健造 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第四期〕……………和田順子

連載

季節の移ろい……………二十四節気……………正木ゆう子
俳人の住む町……………藤本美和子・山口昭男
編集室の風景……………草の花俳句会
二度目の俳句入門……………長谷川 權
旧派の俳句……………秋尾 敏
知つてるようで知らない俳句用語……………井上泰至
今月の句……………翡翠俳句会

俳句と随想12か月 安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音花

卒業歌

石川理恵

料亭の高塀越しの木の芽かな
来客に木目込雛を褒めらるる
伸びやかに仮設校舎の卒業歌
卒業証書丸めて覗く未来かな
別れがたき卒業生ら其処此処に

岩木山

染谷風子

落飾の浮舟勁し雛納
篝火や闇に浮き立つ白魚舟
遠富士を波の彼方に白魚汲む
山笑ふ画布にたつぷり空の色
春の水掬ひて仰ぐ岩木山

てふてふ

渋谷きいち

戀ひわたる地藏の欠けて春疾風
初蝶の越えざる塀の高さかな
追ひ縋る初蝶友のごとくなり
山すみれ見付けたる所日のやさし
山笑ふ歩いて磨く審美眼

春の水

横山君夫

山削り大河へ急ぐ春の水
なで肩の壇のすがたに春の水
雪柳ひよいと黒猫貌を出す
溪流の音軽ろやかに猫柳
卒業や「幸福論」と格闘す

岩陰の魚

保坂翔太

微動する岩陰の魚冬終る
農道に軽トラ二台冬終る
探梅や地酒リュックに一万歩
雪虫の群るる地藏のよだれかけ
春寒し無口の父の無口かな

猫車

笹本啓子

犬の顔ほどの残雪庭の隅
蜺搔き夕日を背に親子舟
離乳食の嬰に一匙蜺汁
乳ねだる嬰の瞳や鼓草
春大根老いの手足の猫車

跳ね太鼓

曲淵徹雄

御坊まで一里の小道いぬふぐり
草萌を蹴りシャドウボクシングかな
春の月寄席の木戸洩る跳ね太鼓
蒼天へ容ととのへ櫂の芽
拾ひ読む幸せの記事春の雪

春の夢

河野はるみ

朝の茶柱今日は彼岸のお中日
出船入船まもる岬の黄水仙
泥団子ベンチに並べ春うらら
ひと光甘き夢連れ春の雷
牧笛の微かに聞こゆ春薄暮

風光る

下川光子

風光るいつもの川を渡りても
小流れに光の踊る雪柳
雲一つ朝寝の窓に横たはる
朝寝して窓の雀に囀さるる
春泥の靴を渋谷のハチ公前

春の息吹

越田栄子

咲きさうな蕾ふるはす春の雪
手に馴染むおてだま五つ母子草
青き踏む里の息吹を感じつつ
春の山萌黄色より始まりぬ
火伏せの神の御座す頂春の山

進水式

梅澤輝翠

進水式諸手を挙げて春の海
燕来る像型届く鉄工所
蒼穹を十字切り切り燕来る
粉つけて笑ひ止まらず鶯餅
うららかや砂場いつばい泥団子

女子会 寺内洋子

彼岸会や雨やはらかくなりにつけり
左党の夫にぼた餅供へ彼岸かな
彼岸会や戦の絶えぬ星に住み
女子会の原点はこれ雛まつる
白酒や女同志の愚痴話

たんぽぽ野 西幅公子

地母神の目覚め一気に春の色
つーばめつばめ泥ある所見つけたか
幼女吹く蒲公英の絮つぎつぎと
残雪や低木びゅーんと跳ね返る
うららかや砂のトンネル泥まみれ

へしこ 松島寛久

水温む海ある奈良にへしこ買ふ
八百姫や人魚を食べて春の雷
アイヌの熊は神様イヨマンテ
遷宮の棟梁に雨花や伊勢参り
時止る村にたんぽぽ息づける

卒業 瀬戸雄二郎

突き棒に尻を押されて卒業す
群れ抜けてひとり河原へ卒業子
いつの間に替りてをりし卒業歌
あの恋は答出ぬまま卒業す
卒業の校門後に振向く

おむすび 石田慶子

おむすび二つ椀は大振り蜆汁
春の土新米ママのベビーカー
小さき雛手招きをする洋菓子店
小流れに身投げするごと落椿
閉店の文字の揺らぎや椿落つ

沈丁花 鈴木玲子

急ぎ足にぼたりと紅き椿かな
高台に五色椿の矜恃あり
古民家に五人囃の音聞こゆ
庚申塚の横に沈丁匂ひけり
主なしとて香り変はらず沈丁花

タイの象

野村 美子

麗かや鼻で絵をかくタイの象
浅草の車夫の半纏春うらら
球磨川の急流下る春の風
天を突く奇岩奇景や山笑ふ
三月の奄美の海や波のたり

仲 春

山戸 美子

仲春や平和過ぎると帰国孫
羽ばたけと言へど寂しき春半ば
我先に園児飛び出す春の雪
幼犬の行きつく先に藪椿
書道家の多忙極まる春半ば

雪下ろし

田中 章嘉

積雪や人もお手上げ五メートル
雪国や春風を待つ卒業式
彼岸前携帯電話故障して
挿し薔薇の目醒めし頃の寒戻り
山林の煙の中に鳥の巣が

春の星

宮崎 チアキ

春未だ味はひ仄かにカレーパン
松が枝にふはふは積もる春の雪
大和人の心揺さぶる大石忌
遊びつつゆるりに到着春の星
平穏な故国恋しと亀の鳴く

啓 蟄

高橋 満耶子

啓蟄や方向音痴は親ゆづり
啓蟄や帯を解きましたよ城の松
山の辺の野草生き生きお中日
春疾風山の火災に雨乞ひす
天国へ「風の電話」や春の園

春の山

森 和子

手話交へ故郷語るや春の山
籠り居る夫を促し春の山
単線の電車待ちをり春の山
熱が下り身内に沁むる蜆汁
汽水湖の口の堅しや蜆貝

春の風 綿貫 ひさの

登校の列に燥ぐ子春一番

ボンボンポロン「小犬のワルツ」朧月

献立のあれやこれやと土筆摘む

春風や音合はせ聞く楽屋裏

紅椿柱に一枝師の笑顔

風眩し 葛城 千世子

寄せ書きに読めぬ黄の文字卒業す

髪にカチューシャ飾り映画へ風眩し

採寸のSSびたり新社員

休憩はゲームに夢中受験生

麗かなれど途中で止まる自動ドア

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 6月号

特集
未来の結社は
どうなる？

横澤放川 石寒太 吉田千嘉子

加藤かな文 上田日差し

村上頼彦 西村麒麟

タラビ 俳句界NOW 上地安智

特集
鳥と動物の物語

○鳥を詠んだ俳句セレクション
大谷弘至 赤羽根めぐみ

○動物を詠んだ俳句セレクション
遠藤由樹子 松尾清隆

○エッセイ 鳥獣の句の魅力
坪内稔典 奥坂まや 北柳あぶみ

隔月連載

座談会
若手句集
を読む③

相子智恵
抜井諒一
堀田季何
(司会) 井上泰至

【注目の句集】
矢野景一『圭復』
丸山美沙夫『虎落笛』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 栗林 浩 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

令和七年

水 明 賞

菅 原 卓 郎
新 暦 文

令和七年

季 音 賞

河 野 はるみ
曲 淵 徹 雄

山本鬼之介

審 査 経 過

◆水 明 賞◆

令和七年の水明賞は、令和七年三月十日の水明賞審査委員会において受賞者を決定した。審査委員会では、先ず委員五名から受賞に対する総論を述べ、次に令和六年の水明集巻頭作家を候補者とし、各月の作品の出来映えや順位、更に、十一・十二月合併号での水明競詠の順位も審査対象として全委員が十分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記二氏の受賞が決定した。受賞者各位は、今年七月号より季音「花」欄の作家として更に研鑽され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層発揮した作品を発表されることを期待する。

◆季 音 賞◆

令和七年の季音賞は、令和七年三月十日の季音賞審査委員会において受賞者を決定した。審査委員会では、先ず委員五名から受賞に対する総論を述べ、次に令和六年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者とし、その作品について各委員が十分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記二氏の受賞が決定した。受賞者各位は、今年七月号より季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけられると共に、後輩の指導にも心配りされることを望む。

令和七年

かな女賞

永野史代

令和七年

新珠賞

石関六弦
岡田宣子
菅原卓郎

山本鬼之介

審査経過

◆かな女賞◆

令和七年のかな女賞について、三月二十八日に主宰より、水明二代目主宰・長谷川秋子に師事して以来、五十五年の永きに亘り水明一筋に俳句の研鑽を積まれ、これまで多くの会員に模範を示された永野史代氏に授賞する旨を網野副主宰と大村編集長に伝え同意を得た。

◆新珠賞◆

令和七年の新珠賞は、令和七年三月二十八日の新珠賞審査委員会において、審査委員七名と各地区委員四名計七名による審査結果を基に念入りに協議を重ね、上記三名の受賞を決定した。審査経過は左記の通り。

第一次審査Ⅱ応募作品二十三編について、各委員が新珠賞に相応しいと判断した作品を五作品選出し、それぞれに三点・二点・一点を配点した選考資料を提出。

第二次審査Ⅱ選考資料について審査委員七名が協議の結果、獲得点数の多い五作品「音のある情景・雪の降る街・とりびあ・水のある風景・観る者の無き」が第二次審査を通過。

第三次審査Ⅱ右の五作品について、審査委員七名が作品の評価内容を披露して協議を重ね、最終的に投票によって上記三氏に授賞することを決めた。

令和七年

鼓 笛 賞

反
町
修

令和七年

山 紫 賞

綿
引
まりこ

大村節代

網野月を

◆鼓笛賞◆

令和七年の鼓笛賞は、令和七年三月の選考会において、山本鬼之介主宰と網野副主宰の三者協議の結果、反町修氏に決定しました。吉川拓真、菅原卓郎の二氏の名も挙がりました。

鼓笛集は水明集会員の研鑽の場です。編集部から投句の月には投句依頼状を差し上げますので、欠かさずご投句お願いします。尚鼓笛賞は一度受賞しても、次年度も受賞選考の対象となります。

◆山紫賞◆

令和七年の山紫賞は、令和七年三月二十八日の選考会において、山本鬼之介主宰、大村節代編集長のご合意を経て決定しました。受賞者は、巻頭一回を含む特選六回に選抜され、充実した作品を発表されました。なお最終選考には他に青木鶴城氏、内田恵子氏が残り健闘されました。

当該受賞者は、山紫賞への投句、また特選への選出は以後同様ですが、本年以降の山紫賞受賞対象とはなりません。

新季音同人(昇欄者)

○新季音「雪」欄

松井 由紀子 森川 義子

○新季音「月」欄

石川 理恵 松島 寛久
瀬戸 雄二郎 田中 章嘉

○新季音「花」欄

池田 珪子 清水 桂子
篠崎 紀子 加藤 でん治
佐々木 史女 山岸 久美子

最近の名句集を探る

座談会

青木百舌鳥『めらめら』

青木ともじ『みなみのうを座』

鈴木総史『氷湖いま』

大西 朋

司会：筑紫磐井
藤本美和子
渡部有紀子

俳人協会新人賞・

田中裕明賞受賞記念

作品20句

浅川芳直

○巻頭三句

小川軽舟／辻恵美子

和田順子／復本一郎

伊藤康江／樽谷青濤

○今月の章

久保純夫／吉田林檎

○俳句と短歌の10作競録

駒木根淳子＋中川佐和子

○今月のハイライト

「澤」創刊25周年

人と作品

一句鑑賞

総論

一句鑑賞

山田耕司

青木ともじ句集

『みなみのうを座』

阪西敦子

今泉礼奈／黒岩徳将

俳句のつまずき

諸家書架

二ノ宮一雄

一筆百里

えんぶり吟行記◎大西朋

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、

俳人の書き

大西 朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

高屋重三郎の手摘けた

本の図版を掲載

藤村公洋

俳句のつまずき

秘矢まりえ

諸家書架

二ノ宮一雄

一筆百里

俳句四季
Haiku Shiki

2025年6月号

5月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

新 珠 賞 (結果報告)

○受賞作品

音のある情景

石 関 六 弦

雪の降る街

岡 田 宣 子

とりびあ

菅 原 卓 郎

○応募作品

(到着順)

水 温 む

榎 本 道 代

四季追憶

香 田 裕 誌

飛び立つ君へ

南 條 きわゑ

ビストロ

田 中 弘 子

難転を願ふ

平 野 楽

見沼に暮らす

三 浦 真由美

水 精

皆 川 更 穂

鎮 守 の 森 秋 谷 風 舎

春 兆 す 前 田 夏 野

少年の日の忘れもの 森 下 山 菜

大 空 へ 石 井 直 子

冬を生きる 反 町 修

星 尽 し 飯 田 忠 男

水のある風景 播 磨 進

観る者の無き 吉 川 拓 真

秋 冬 記 石 黒 由 美 子

響き合ふ音 綿 引 まりこ

満 つ る 小 山 あ つ 子

追 憶 椎 名 泰 子

農ある暮らしの四季 中 村 留 美 子

『水明誌』を繙く（水明三月号）

後藤よしみ（「鷗座」「小熊座」同人）

もう一度も一度と振る初御籤 十倉和子

初詣でのおみくじである。社殿にまず詣でる。そして、おみくじを引き、新年の運勢を占う。引くのは自動販売機、みくじ箱、そして作者のようにみくじ筒からとなる。みくじ筒をよく振り、みくじ棒を引く。その番号のくじを取り出しては、吉凶の運勢を見る。大吉から凶まで様々にあるが、大切なことは、本文にあるメッセージという。吉凶で一喜一憂するのではなく、お告げをよく知ること。参拝した折に引いてみるひと人も多いことだろう。

さて、作者はどうであろう。もう一度、筒を振っている。最初の吉凶に満足せず、新年をさらに良くしようとかくじを引き直す。特に凶が出たときは、吉にしたいと思う。詣でた願いをかなえたい気持ちがありありと伝わる。しかし、運勢は心持ちでいかようにも変えられる。もう一度のリフレインが、そのことを分かりつつもくじを引き直す姿に人間味あふれるものを感じさせる。ある種の俗が生き生きと表現されているのだ。水明句の品のある句群の中で、存在感のある光る一句となっている。

枯野行く顔の小さくなつてをり 大村節代

一見、不思議な句である。水明作家の多くは、平明、具象、スケッチ風の作風であるが、何れとも異なる。人にとって顔の大きさは、成長により違ってくる。一歳では、四頭身の比率。十二歳で七頭身となり、成人ではダヴィンチの人体図と同じく八頭身である。

掲句はこの肉体的な大きさではなく、精神的なものをいいあらわしているといえよう。精神の働きの知・情・意のうち、頭が小さくなるところから情がおもてに出てきているのだろう。吉田汀史の句に「枯野ゆく徒手空拳も老いにけり」がある。徒手空拳という気概よりも生身の身体に重きが置かれるが、やはり現実の孤独を詠っているようだ。その心持ちの点でいえば、作者も孤独を枯野という言葉に託しているのかもしれない。そうすると、作者は孤独の世界をはずしずつと歩む姿を描いている。この姿は、世間へ顔を大きくすると逆の小さくすることで世俗の欲を捨てている。そして孤独を受け入れ、あるいは同化し、枯野という海原の船となっているのであろうか。それも一興である。

現代俳句鑑賞

網野月を

人体は馬にはなれず 初芝居

中村和弘

〔俳壇〕 3月号・泥の精より〕

歌舞伎などの演出では頭と前足の担当と後ろ足の担当の二人掛りで馬役をこなすことになっている。馬子にひかれていゝる時は良いのだが、時として主役の武者役が実際に騎乗したりする。滑稽味のある句意であろうか。その滑稽さが座五の「初芝居」で担保されて、「初」の目出度さが醸し出されている。他に「深海の泥の精なりずわい蟹」がある。

流速の日々に残りぬ古コート

中西夕紀

〔俳壇〕 3月号・炭赤しより〕

上五の「流速」の意は、単なる単位時間内の速度ではなくて、「はやい」の意を含有しているように解釈できる。座五の「古コート」には作者ご自身を投影しているとも解釈できるだろう。または来し方を象徴させているとも解釈できるであろう。他に「炭赤し詩に汚れしと師の言葉」がある。

不揃ひの伏字野太し鳥渡る

長嶺千晶

〔俳壇〕 3月号・祈りより〕

「伏字」は活字のない字、いわゆるゲタⅡの場合もあるのだが、掲句の場合は、明記することを憚る字と解釈した方がよさそうである。その「伏字」が「不揃ひ」でまた「野太」ということである。「不揃ひ」は「伏字」の意味内容の多様性を表し同時に、「伏字」で伏せたはずの字の本来を承知しているからこそ「野太」さであろうか。他に「秋孤りあるをぞらへ夫悼みつつ」「人すでに祈り忘るや暮早し」がある。

忍者出づ掛大根を押し分けて

丹羽真一

〔俳壇〕 3月号・忍者より〕

誰かを「忍者」に譬えているのであろう。「忍者」と捉えた発想が何ともユニークである。「忍者」に似ているのか、「忍者」に扮した子供でもあろうか。「掛大根を押し分けて」ぬつと顔を出す子どもならさぞ可愛げである。「忍者」ごっこに遊び疲れて「濡れ縁に」転寝をする景が次句に叙景されている。次句には「濡れ縁に忍者の頭日向ほこ」がある。

白髪のひとつに寄り添ふ櫻かな

浅井敏子

〔俳句界〕 3月号・鎌倉櫻より〕

中七の「寄り添ふ」をどのように解釈するかであろう。つ

まり「白髪のひとつ」と「櫻」の関係性である。物理学的に、空間的に捉えてしまふよりも、むしろ両者の心的関係を読み解いた方が句の本意に近づけるような気がするのである。他に「守られて原種の櫻ひと咲き」がある。

ふんだんに雲を見送る凍豆腐

藤田直子

〔俳句〕 3月号・まぼろしのより

上五の「ふんだんに」は副詞として解釈すれば、「見送る」の動詞にかかるであろう。心ゆくまで見送った、という意味になるだろう。ただ何かの言葉を省略しているとすれば、まだ別の構成でも解釈ができる。「ふんだんに」押し寄せてくる「雲」とも、「ふんだんに」山積みされた「凍豆腐」といった具合である。とはいえこの句の魅力はやはり上五の「ふんだんに」なのである。他に「まぼろしの機^{はた}の音聞く雪の良夜」がある。

象よりも淋しき日なり春障子

塩野谷 仁

〔俳句〕 3月号・膜薄くより

鑑賞文は要らない。筆者の心の底にいつまでも存り続けるであろう句である。他に「膜薄くコーヒーミルク春愁い」がある。

夫病めば銅のごとし冬の河

神田ひろみ

〔俳句〕 3月号・鑑真香より

中七の「銅のごとし」を如何様に捉えるかであろうか。筆者は、病夫の意志強さを感じ取った。座五の季語「冬の河」の剛直さがその通りである。他に「大寒や鑑真香の火に反りぬ」「鑑真香をりをり炷けば冬尽くか」がある。

山茶花の咲きしだけ散る面倒な

伊藤政美

〔俳句四季〕 3月号・枯野道より

上五中七の句意は、そう言われればそうである、と言わざるを得ない。普通、「山茶花」が咲くを愛で、「散る」をまた愛でるものであるが、作者は座五で突き放してしまふ。もちろん散る季節は朝な夕なに落ちた花びらを掃き清めるものがあるが、「面倒な」という措辞は、無感情な意味としても取れる。が、これを人の生き様と捉えようとどうであろうか。句に込めた作者の意図の奥深さに触れる思いがする。他に「熱燭や昭和の頃はジンフィズ」がある。

海鳥の真水を飲み に日脚伸ぶ

西山 陸

〔俳句四季〕 3月号・汀までより

普段は海水を飲んでいる「海鳥」もまた「日脚伸ぶ」日には「真水を飲」んでいるというのである。筆者は「海鳥」の生息は知らないが、海鳥といえども待春の季になれば、のんびりとした感覚を持ち合わせるかのようなのである。「の」「を」「に」の助詞が巧みに組み合わされている。他に「汀まで水満ちてゐる春隣」がある。

一木を一切として蔦枯るる

湯口昌彦

〔俳句四季〕 3月号・四季吟詠より

一木を頼りに絡みつく枯蔦を描写している。一木の樹は多分葉を落として冬を耐えているのであろう。絡みつく蔦もまた葉を落として必死にしがみついている。中七の「一切として」が両者の関係性をすべて物語っている。

俳誌望見

梅澤輝翠

「沖」

令和七年二月号 通巻六五三号
主宰 能村研三 発行所 千葉県市川市

昭和四五年 能村登四郎が市川で創刊。師系水原秋桜子。能村登四郎。「登四郎の美学を継承しルネッサンス「沖」をめざす」を理念とする。(月刊)

主宰詠「音無き音」十句より

百畳に柱のなかり寒稽古

寒の三十日間武術や芸事の稽古を行うとされる。百畳もある広さなのに柱のなかりとあるので武術の烈しい稽古なのではと思われる。寒の寒さに耐えぬいて師弟共に厳しい稽古を為しえた暁には一段と成長された姿を見る事でしょう。

鍋の蓋をどるといふも狩の宿

山深く、網や銃などで仕留めた獲物を宿のいりりで大きな鍋に野菜と共にたんまりと入れて、猟師仲間と今か今かと待っている。やがて鍋の蓋がカタカタという音とともに持ち上がる。さあさあ差しつ差されつた宴の始まり自慢話などに花が咲き夜の更けるのも忘れてしまします。

雪となる音無き音に目覚めけり

いつもの朝より少し寒いのであろうか、ふと目覚めそつと窓の外に目をやってみると、白いものがチラホラと、あー雪であったのか。音もなく舞い降りてくる雪。しばし眺めている今朝でありました。

蒼茫集 五二名 各六句より五名

耕二忌や枯木は根元広くして 甲州千草
着ぶくれてゐて正論を避けてをり 吉田政江
組めば牛走れば豹のラガーかな 能美茅柴
もの言うて独りに気付く冬灯 栗原公子
波音か雨かと聞かれ白障子 栗坪和子
潮鳴集 一二五名 各五句より五名

余生いま降りみ降らずみ初しぐれ 上田玲子
父あらばきつとこの席白障子 古山智子
冬館鏡にシャンデリア無限 須賀ゆかり
裸木のそそり立つ空憂国忌 浜田はるみ
累累と日本人なり柿の朱 村上葉子

沖作品 主宰選 一三〇名 各五句より三名

セーターの分の厚みの白衣かな 松倉聖子
舐むるがに板彫る志功冷まじき 久礼隆志
綿虫に嫌はれてゐる掌の微熱 結城節子
沖作品は飛鷹選評として主宰が松倉聖子氏以下十四名の
方々からの一句を選ばれ細かく選評されてます。

どの句も情景を細かく解釈されており作者にも読み手にも
心の暖かさが伝わってきます。

沖創刊55周年記念

能村研三句碑建立除幕式のお知らせ

沖創刊55周年記念事業の先がけとして能村研三主宰の句碑

『川を生む山の力や幟立つ』句集「鷹の木」所収

除幕 祝賀の日 二〇二五年五月三十一日(土)

場所 市川市国府台 里見公園

五月晴れの佳き日55周年おめでとうございます。

益益のご発展を祈念致します。

水明創刊 95 周年 記念特別作品募集

記念全国大会・記念祝賀会のご案内の通り、水明創刊 95 周年を記念して、下記のとおりで俳句・エッセイ・評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外は何方でも応募できますので、奮ってご投稿下さい。
なお、受賞者の表彰は令和 7 年 9 月 28 日の記念全国大会にて行います。

応募要領

- 【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。
- 【応募部門】 ①俳句作品：30 句（表題を付す）（応募用紙を発行所迄ご請求ください）
②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 5 ～ 10 枚）
③評論：1 篇（400 字詰原稿用紙 15 ～ 20 枚）
◆①は応募用紙を使用。②③はタテ書き B 4 判 400 字詰原稿用紙を使用する
◆文字は楷書で丁寧に記す（鉛筆書きは不可、黒ペンを使用）。ワープロ、パソコンによる原稿も可
◆いずれも未発表作品に限る
◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）と氏名（俳号）を明記する
◆複数部門への応募も可
- 【応募締切】 令和 7 年 5 月 25 日
（令和 7 年 4 月 1 日から受付開始）
- 【送付先】 〒330-0064
さいたま市浦和区岸町 4-10-21 水明発行所宛
※「記念特別作品」と朱書する。
- 【選考委員】 主宰・副主宰・大村節代・石山かつ子・石井喜恵
◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、受賞者を決定します。
- 【授 賞】 俳句・エッセイ・評論各部門に授賞します。
正賞 1 名：賞状と副賞 5 万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）
準賞若干名：賞状と副賞 2 万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 網野月を（☎080-7580-0208）へ
お願いします。

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

■記念全国大会

日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1
行 事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞
の表彰
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状授与
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

■記念祝賀会

日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1
行 事 ・来賓挨拶（現代俳句協会会長高野ムツオ氏、
遠山陽子氏、池田澄子氏などを予定）他
・アトラクション他
新誌友紹介。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

※大会・祝賀会の時間および参加費等の詳細については改めて
ご案内いたします。

水明俳句会 水明創刊 95 周年記念全国大会実行委員会

水明創刊 95 周年記念特別企画

水明創刊 95 周年を記念して、記念特別作品を以下の要領で企画
しました。全ての誌友・同人・季音同人の投句をお願いします。
9 月・10 月合併号に掲載する予定です。

投句要領 【兼 題】 「水」 「明」

※詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年いずれも可）で一句ずつ

【締 切】 7 月 25 日

※投句用紙は 6 月号に添付します。

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

水明創刊九十五周年記念

兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるってご応募ください。

兼題

「雲の峰」

入道雲、積乱雲、雷雲

「螢」

ほうたる、螢火、
初螢、夕螢、宵螢、
源氏螢、平家螢

「白」

詠込み

※右の傍題以外は不可とします。

句数

通じて二句（一組）

- ・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
- ・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円

締切

七月三十一日（発行所必着）

※投句用紙（水明六月号に同封）を使用のこと。コピーも可。

山本鬼之介 選

水明集

うりずんや「十九の春」の流れくる

追憶のロシア民謡雪椿

おつかれさま土鍋を奥に冬終る

拳万に小さな恋の春はじめ

春めきて万古急須の掌に馴染む

花片栗と同じ目線のひと時よ

薄氷や叶はぬ恋の化粧坂

花屋いとなむ勝気な娘風光る

薄氷をしやりしやり急ぐ今朝の道

春障子明日の式服ある長押

さいたま 清水桂子

菅原真理

さいたま 小林京子

初霞天女の裾と覚ゆかな
雪時雨傘を傾げてすれちがふ
ツインタワー跡地紐育の春
勝負師の確たる眼冴返る
曾祖父は明治の男紀元節

格子戸の奥の暗さや春浅し
沿道の色無き木々や浅き春
指輪抜き水菜たつぷり洗ひをり
薄氷を目がけ踏みゐる登校児
嬰兒抱き縁の日差しに春を待つ

篝火に出陣めくや初詣

夜明かな孤影の浮かぶ初鴈

梁の上走る同居の嫁が君

初東風や棧橋揺れてかもめ舞ふ

冬晴やひつそり眠るスタジアム

月おぼろ黒子をかくす舞扇

億万の星の一つや冬の果

凍返るラインの魔女の呼ぶ声が

山焼や明日の予報は雨催

木守袖つひに落ちたる冬の果

岡田宣子

寺町知子

飯田忠男

平塚 丸屋詠子

身ぢろがぬ太公望や春時雨
今日もまた方向音痴春の昼
お待たせと鶯餅を仏壇に
スパイス香る駅裏通るひばり東風
笑ひ泣かせる喜劇の舞台二月果つ

利根 倉田星歩

梵鐘の余韻煙るや雪時雨
雪しぐれ竹林揺らす乱鴉かな
飼猫の夜具に押し入る余寒かな
冴え返る空に一条飛行ぐも
ピラ配り指の麻痺する余寒かな

さいたま 播磨 進

春寒や千切れて久し猫の耳
春愁や母の句集を読む夕べ
春の日や小さき手を這ふだんごむし
避け難き陥没箇所や春寒し
武蔵野の台地の崖に春の水

さいたま 森下山菜

空に鳶地に犬ふぐり膝に頬
湯の町にとこや三軒山笑ふ
梅二月祖父が枯木に灰を撒く
無人駅舎に登山者ひとり冴返る
春宵や配水塔のロマネスク

霜多光代

麗子像の片眼の光り冴返る
他愛なき猫の仕草の日永かな
救世観音宝珠持つ手の冴返る
春菊や幼児摘みたる葉の柔し
バレンタインデー朝から文鳥うたひをり

反町 修

寝尽くして地中の生は春を待つ
春の夜や下弦の月の照らす宴
月面に降りたるごとし焼野原
札所巡り春の足音秩父路に
寒明やショーウィンドーの模様替へ

越谷 阿部幸代

春立つや夜気をふるはせ相馬節
春の日の三橋美智也のエルピー盤
春だより万年筆の太字もて
春の燈のこぼるる庭に白い椅子
蒜山に父祖の雄たけび山火かな

皆川更穂

春の浜那由他の砂に聞く先史
鳴き龍の余韻鎮もり冴返る
足裏に弾む緞通迎賓館
胸を抜く祈禱の太鼓冴返る
バレンタインデー愛は形で示せとや

予報士のトーン高まる余寒かな
木綿針曲がりたるまま針供養
閉ざされし旧家の扉木瓜の花
春寒や鳩のみ目立つ蚤の市
帰り道鞆に乘ることにする

さいたま 元田 亮一

黎明や湖沼静かに牙返る
薄水に日光菩薩乗船す
探梅や藪に分け入る白一輪
靴紐を結ぶ児の背の風光る
一瞬に瞳潤むや春の星

さいたま 加藤でん治

席譲る子の成長を春立ちぬ
しやぼん玉一つひとつに祈り込め
薔薇の芽の数をかぞへて登校す
訪ねたる家に連翹咲きみだる
伸びやかや菜の花を背に子は並び

篠崎 紀子

伊 奈 菅原 卓郎

親鸞の泊りし寺の寒椿
厨より薄墨の佐渡親鸞忌
濤高く佐渡の見えぬ日春を待つ
春を待つ五百羅漢に小糠雨
冬桜一縷の紅を引きにけり

池田 珪子

特攻の笑顔の遺影牙返る
山寺の千十五段牙返る
春菊の苦味の判る四十路かな
バレンタインの日母に自慢のチョコ二つ
バレンタインの日外科病棟の友見舞ふ

さいたま 新 暦文

「トロイカ」を歌うて血潮満つる春
一番鶏の声高らかや冬の尽
春灯の今宵ブーニンショパンかな
山焼はバレエ「火の鳥」観るが如
東雲の庭にま白の梅の花

山岸久美子

誰待つや頬杖雪の喫茶店
捌きたる魚に塩打つ雪時雨
城隠し城見せもして雪時雨
階段が好きな幼と春を待つ
おほどかな志功の菩薩ぼたん雪

本橋 稀香

裏白やびたりと止まるやじろべゑ

さいたま 綿引まりこ

さいたま 田中弘子

朝食の孫はやさしく寒の水

下萌や十五の春は輪をつくる

淡雪の肩にひとひら夕間暮れ

春雪の明石海峡光る濤

立春や生き甲斐もてば目輝く

立春や謙虚と自信付き招く

立春や笑顔で余生邁進す

過ぎし日を懐古する庭余寒かな

初場所を龍が盛り上げ横綱へ

杉戸 佐々木史女

竹澤和子

トテ馬車の巡る湖畔や霜の花
強霜やきりと締る結び帯

風花や車窓の角に缶コーヒー

風花や蹴出し覗かせ神楽坂

凸凹の錆浮くバケツ野火走る

さいたま 森美枝子

吉川拓真

節分や心の鬼を打ちつけて

馥郁と咲く低木の梅の花

蠟梅の透ける花びら香り秘め

萼咲く古伊万里さがす骨董市

落椿湧水の堰紅く染め

東京 畑宮栄子

阿部貞代

かはたれの白より白し冬の梅
職人の口より小釘春日差す

鴻山の象やはやはと小布施春

綱打ちのひふみの声や春を待つ

江ノ電の馴染の軋み冬の梅

片栗の花山裾に和紙の里

一花もよし群生もよし片栗の花

曇天は閉ぢたるままに片栗の花

薄水を割りていくつも日の光

薄氷に紅き花びらまた咲きて

節分に柔らかに雨鳥しづか
節分を煉瓦の壁のレトロカフェ

節分や入れる店のありがたし

節分に大きバーガー切りけり

平らげて節分の世に浸りけり

縄文の遺構の丘に初日射す

和菓子屋の戸口に鎮座福寿草

福寿草這ひ這ひの児に毛糸帽

血圧値数の子の塩さらに抜く

安寧を祈る初日の世界地図

大寒やボッチャに挑戦勝利せり

さいたま 小川洋子

薄氷に魔が差しジャンプ手に負傷

薄氷に静止の鯉や日が昇る

春遅し勝手気ままな浮雲よ

手直して卒園式のそろひ服

風花や寄り道誘ふ足湯カフェ

寒稽古気合かするる変声期

煮凝や昨夜のいさかひ収め時

放水に鎮まる心野焼かな

空気でふ愛ありバレンタインデー

白魚やその目に憂ひ湛へたり

白魚に帆引網漁適ひけり

薄氷や皆鈍角の幾何模様

ここ確か家があつたぜ雪深し

旧友の肉筆の文春待てり

梅二月なに事もなき母の家

夫の名の表札外し花ミモザ

戸を練れば庭の朽木に春時雨

春時雨髪のちぢれは父譲り

梅びより子猫まどろみ膝の上

川口 新井のり子

甘やかなる宵まだ遠し浅き春
余寒ある親指に頬ぬぐはるる

靴底の余寒ふるはす膝頭

雪しぐれ相合傘を今すこし

白無垢や地へ嫁がむと雪時雨

農舎開くシャッター音や春の風

荷物解く里の息吹や木の芽時

畝筋を潤す雨水滲み渡る

ありし日の鳥羽川漁り蜆汁

語らひに耳そばだつる猫柳

薄氷さらり触れたる本音かな

去り際は目立たぬやうに薄氷

白魚の黒目ざわめく小鉢かな

家中の電子音かな春夕べ

文鳥の呼べば応ふる春日向

白梅や友への文に香を添へぬ

薄氷にタツプ踏む子の三三人

登校の列の乱れや薄氷

白魚の鰭握る指魚のごと

白魚や喉にするりと北の漁場

今西 操

吉川 杉浦千祐

若狭 岡本祥子

さいたま 木谷葉子

寝返りできて稚子につこり福寿草

寒水で薬七種を飲み干せり

離乳食に満面の笑み春灯下

春遅し無言館への旅惑ふ

廃校の道の駅にて鹿尾菜買ふ

さいたま 森下美智枝

夜廻の供は昂や柝の音

巖にて朝日を待つや初霞

日の本の裾なる丘や草萌ゆる

達人の藝の証や薄氷

吉野山といへば恋しや西行忌

秋谷風舎

腸を洗ふが如く寒の水

夫病めば妻も病みをり枯木立

春炬燵摺まり立ちの吾子の笑み

妙薬と信じ一碗蜆汁

春の星先妣思へば泣けてくる

若狭 山崎郁子

初日待つ山頂小屋のカフェタイム

標柱の文字は「上三つ」春の山

根菜のばちつと裂くる寒の水

丸ごとを汁に預けて蜆汁

野焼あと近づきたるや豊後富士

畠中風花
(八重子改め)

若狭 松村笑風

同じ釜につく夫婦や春の朝
早春や古希を記念の一人旅
伊勢参り終へて湯浴むや旅の宿
野焼くや生まるも去ぬも只ひとり
葬られし父の気配や春の宵

さいたま 香田裕誌

熱爛や五臓に問ふて嗜めり
三代の杜氏の氣負ひや寒造り
毒舌の優しくなりてちゃんちやんこ
モノクロの下越の海や波の花
湯豆腐や親の流儀を鑑みて

小野町子

湯たんばの栓は真鍮昭和かな
湯湯婆の波うつブリキ足裏おく
胸元のリボン結びや春立てり
豆腐屋のラッパ高らか春立ちぬ
蓬摘む指先あをく匂ひけり

石黒由美子

茶屋街の弁柄格子冬の雷
鰯起し明日待ちわぶる老漁師
北国の入江の番屋虎落笛
会席の煮凝ブルン居を正す
下駄箱にバレンタインのチョコそつと

半纏と掛け声走る野焼かな
手の甲に掬へぬ想ひ春の雲
雪解けの四万十川や長き竿
落椿かすかな音を空に置く
風光る足裏揃ひし修行僧

さいたま 山下ユリ子

下萌ゆる摘めば命のにはひぞす
まろき背をかがめて母は蓬摘む
春の雨雫のままを受け取りて
甘やかな花の蕾の声聞こゆ
そよ風にはしやぐたんぽぽ草野原

さいたま 小山あつ子

失ひし時隠れをり薄氷
瘦せ枝に余る光や春立ちぬ
朝まだき踏み出す里の梅ふふむ
春塵やパソコンの敵鼻の敵
鶯菜の煮干し肥育ち頂けり

前田夏野

所沢 飯室夏江

透影や水仙だけの知るうつつ
冴え返る版木に写す鳥の翅
美容師のよもやま話春ささす
九州の味噌に和へたる分葱かな
麦チョコのぱふんと割れて春めける

大阪 遠藤人美

木目目覚め鳥さざめきて春動く
人恋ふる鎮守の杜や山笑ふ
春眠やけぶる夢路に果もなく
繋ぐ手の温き娘や春やしる
Y字路に佇む我に春の色

さいたま 鈴木香音子

冴返る油断のならぬ二枚舌
草萌や独り静かに決断す
雪虫は子供大好き白き道
待ちきれず勇んで出れば春一番
春立つや夕餉終へても席立たず

さいたま 川島夕峰

寒明けや小さく手を振る女の子
寒明けて目覚めの時や枝の先
梅の花一眼レフも風に揺れ
旅立つ子見送るのみや春告草
梅の花幹老いるとも芳しき

伊藤美津子

駅前の色無き花壇浅き春

さいたま 鈴木藻好

さいたま 三浦真由美

春浅しラーメン店の長き列
公魚や釣り糸の先動きなし
空夜なり早寝決め込み寒卵
誰を待つ野末の淡き水仙花

凍つる朝貼りつき残る白き月

東京 清水美千子

初東風や隣家と隣家の隙間より

平野 楽

顔あらふ水棘のごと春浅し
北窓を開きてひとつ深呼吸
高みより睥睨したる寒鴉
木とともに影絵となりぬ寒鴉

嫁が君銀座の三ツ星レストラン
嫁が君キャットフードに忘れらる
こんなにやくのおでんは串に刺されたし
名も体もめでたき草や福寿草

梅の香や急ぐ足音^{あのと}を引き止むる

川口 田村福美

小駒さち子

老梅の花のしづくや陽の光
表向き元気な米寿春時雨
春時雨寝に入る頃に降りはじめ
静か夜をふしぎと思ふ春時雨

母の部屋梅一輪を届けたり
春立ちて新たな気持ち生まれけり
薄水ばくばく光り近づきぬ
薄水光る銀色すぐ踏みめり
初弘法輪切りどら焼味はひぬ

白魚の生命まるごと食らひけり

さいたま 石井直子

大熊健司

くしけづる髪の毛の細さや薄氷
最強寒波菜花弁当久留里線
寒戻る揺れの激しき内房線
悠久の中国文明木の根明く

湯治場のランブの揺らぎ冬の雷
凍豆腐般若湯酌む坊泊り
負けん気の涙滲ませ寒稽古
約束の人来ぬベンチ冴返る
冴返る階段軋む坊泊り

病窓の眼下見沼田草青む
草野球に歓声の渦草青む

病室にただひとり居る余寒かな
退院や土手に早くも草萌ゆる
零れきてはしやぐ雀ら草青む

さいたま 北出久美子

梅香の通りの先は天神さま
春日差し診察終り駅向ふ

横断の信号点滅春の朝
春灯のやさしく迎ふる車寄せ
春灯に家路を急ぐ人の影

東京 大島千恵

梅咲いて正座の香りありにけり
萼苞にそつと佇み冬牡丹

閑かなり軸突く黄色「石路の花
耳たぶを薄紅に透く日向ほこ
冬枯れの林悠悠大がらす

東京 柳父はる

街角の梅の蕾に声を掛く
寒風や体縮めてとほとほと

小春日に外で寝そべり眼閉づ
寒天の雲を見上げてストレッチ
木枯を酒のつまみに熱燗で

桐山遊童

寒稽古弟子がうつちやる土俵際

めらめらと地を這ふごとき野焼かな
もてなしの煮凝溶けし朝の膳

駅舎から富士見るバレンタインの日
バレンタイン今年も夫へリボンチョコ

さいたま 穴戸洋子

薄氷の亀裂美し調停日

薄氷や心象メモに挟み置く
薄氷小さき長靴しやくしやくと
むくむくと梅のふふみの並びをり
染付きの白梅の今朝ほころぶる

さいたま 横山礼子

ゆで卵剥きて艶なる春の宵

春の夜のメビウスの輪よ「砂の女」
メビウスの輪のごと寒気暖気かな
統合校ファイナル春のコンサート
平飼ひの寒卵食む地球食む

糸井しるく

薄氷やヒールで突く待合せ

百人のチェロの音響く春の午後
チェリストの弓伸びやかや春の星
春の宵祈り奏づるアンコール
友の待つカラヤン広場春の風

稲野幸子

手術後に戻る饒舌春來たる
測量の技師の足許畦青む
下萌や日がな一日深呼吸
構築の路へだてての草青む
新免許証首もとは春色まどふ

さいたま 篠原さよ子

行く春の夢まどろむや遠き恋
夜泣き癖親子で泣き止み山笑ふ
すめらぎも女子のときを山笑ふ
老いてなほ和菓子に託すバレンティン
富士の尾や車窓に映る春氷

草加 持永喜夫

露味嚙をトーストに乗せ朝ごはん
わかさを陶器の皿に飾塩
放課後の無人教室寒き春
海風が運ぶ香や野水仙
春浅し細き流れの用水路

湯浅 和

連なりて猫の散歩や春の昼
駈け込みの健診予約春一番
水行の桶に薄氷割りにけり
拾ひ上げ青空透す薄氷
山裾に三桎の花柔らかき

さいたま 樋口元美

纖月を仰ぎかすかに薄氷
ゆるやかに梅一輪の咲きたまふ
冴返る鏡の奥の眞の顔
首に背に絡みつく吾子春の夢
をちこちに囁く木の芽足留めむ

羽島 秀子

大雪の予報や灯油缶重く
寒波くる寝つけぬままに明けにけり
豆撒きや亡父の大声よみがへる
節分や手作り面に鬼の角
こざつぱり散髪すませ春めけり

鬼石 榊原聰子

春日浴び曲る腰撫で土起こし
若人の打撃練習春飛ばす
浸されし水の中から呟く蜩
身を取るか捨つるも惜しき蜩かな
諸人の願ひ背負ひて絵馬が鳴る

東京 深沢りこ

友の逝く共に梅観る日を待たず
椿一輪小さき瀬を越え流れゆく
甘夏の届き夜鍋のママレード
「うんこ」「おしり」子ら集まりて春うらら
津波濁流雪水攻めに能登や不撓

さいたま 駒谷行雄

十葉の匂ひを付けて犬戻る
空蟬を拾ひて森の沈み行く
風過ぎて江戸風鈴に次の風
夏野菜アサイーボウルの赤と黄
杖と行く滝まで十歩十五歩と

所 沢 関根千恵

雲の夜肩揉む孫の手の温み
凧や道ゆく少女の赤マント
冬木立オブジェと化して鳥一羽
急カーブ路面電車の悲鳴聞く
梅見旅開花予想とにらめっこ

藤 沢 小島喜代子

肉球の跡は楽しげ春の雪
二軒目の湯めぐり浸みる牡丹雪
大木の椿気ままに鳥休む
雲飛ばす風の日八重椿
アスファルトにまた一つ咲く落椿

さいたま 緒方みき子

夕暮の紀の川揺らす鮫の群れ
水温む睡蓮鉢に魚影かな
読みかけの雑誌置くだけ春炬燵
草萌や家庭菜園色づきて
花種蒔く眠れる土を起こしつつ

和歌山 嶋田洋子

手を繋ぎ園児散歩の畔青む
球を追ひスライディングキャッチ草青む
重機振る瓦礫の山の余寒かな
同窓会近況報告知る余寒
家族みな言葉少なし余寒かな

北山建治郎

雨あがるあらここかしこ春や春
コート脱ぎでかけやうかな春の予感
絵本読むまどろむ吾子や春日影
野焼き見ゆ友一歩二歩あとずさり
字余りの俳句作りし春の宵

さいたま 三森恵子

海風に波立つ園や水仙花
観覧車広き眺めや水仙花
背を丸めポケットに手や春浅し
浅春や日差しが救ひ散歩道
買物の道に観賞梅の花

武田重子

初東風のモノに誘はれ人の波
太公望振り向く側に猫柳
川岸に光り輝く猫柳
遊びたる子らに寄り添ふ猫柳
酒進む炙り柳葉魚や五本箸

榎本道代

バレンタインデー一年ぶりに会へたる人

和歌山 南條きわゑ

時差大きいことに驚く二月かな

立春や夜間飛行で留学生

異国より夜中のメール二月かな

ラファミニノフ聴きつつメール冬の夜

梅咲きて教師と子らと里の道

参道の商店街の春灯

嫁ぐてふ旧き言葉よ春灯

梅満宮二人だけの特等席

東京 中村まどか

ホチキスの針を切らして水仙花

高尚な悩み比べの金鳳花

春浅し心ばかりの和三盆

受験子に桜のシール贈りけり

横浜 石井妙子

どつさりとラーメン被ふ白髪葱

雛納め母のこよりの細きなる

父の倍生き八十春の妻送る

藤沢 藤田松邑

父亡くし大阪の春妻めとる

俳句

6月号
予告

5月23日発売

予価 1,200円(本体1,091円)⑩

巻頭作品50句 一片山由美子
作品21句 一行方克巳・恩田侑布子

生誕120年

加藤楸邨

特集

▽総論 石寒太&江中真弓
▽作品論 中嶋鬼谷&今井聖
▽楸邨山脈概要
▽一句鑑賞
▽楸邨散文探訪

第59回 蛇笏賞発表！

●受賞のことば ●自選50抄
●選考委員選評

高橋睦郎・中村和弘・
高野ムツオ・正木ゆう子

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

作品鑑賞

山本鬼之介

うりずんや「十九の春」の流れくる 清水桂子

「うりずん」は、沖縄の古語で旧暦の三月の候を表す言葉である。麦の穂の出る頃で、この頃から南風が吹き始め、暖かくなつて農耕を始める時季である。

作者はこの「うりずん」という日常では耳慣れない言葉に魅力を感じているのだと思う。沖縄本島やそれに付随する島々を旅して持ち帰った心の土産なのかも知れない。

作者は、掲句の曲に魅了されている。この「十九の春」は、昭和四十七年（一九七五年）に、沖縄県で俗謡として発表された新民謡的な歌で、当時沖縄県を訪れた田端義夫が大変気に入る、昭和五十年に愛称「バタヤン」の歌がレコード化されて全国的にヒットした。筆者もこの歌が好きで、勤め人時代に愛唱した。この曲の歌詞は日本本来の七五調なのでとても覚え易く、その快いリズムにのつて歌っていると、その切々たる詩情に包み込まれる。

この俳句は、沖縄に結びついている季語「うりずん」と、

ヒット曲「十九の春」とが織り成す人間模様を、読者に想像させることで成功している。

只今、沖縄音楽グループ「ネーネーズ」のユーチューブでこの歌に聞き惚れている筆者。琉球衣装の女性歌手四人の声に和す三線と太鼓、そして四つ竹による伴奏が実に心地良い。

春 障子明日の式服ある長押

菅原真理

春の陽が射し込む明るい障子である。その障子を背景として、一着の式服が長押の下に掛かっている。春の式典というと、学校関係の卒業式と入学式、そして成人式であろうか。また、季節には関係ない結婚式や個別の式典も考えられるが、春という季節感がもたらす華やかさを前提にすれば、その家の娘が成人式に着る着物が最も相応しいと思う。

冬の間重く冷たい雪に閉ざされていた雪国の旧家。昔なら大身の槍が掛けられていたような重厚な長押に、地元の伝統織物で縫製された和服が掛けられている。春の障子を透った柔らかな光が、その着物を優雅に浮き立たせ、長押がまるで家僕のように付き従っているのである。

雪時雨傘を傾げてすれちがふ

小林京子

時雨には多くの傍題があつて、それぞれが時雨の細やかな状態と雰囲気を表しているが、「雪時雨」はこれ等とは別の

感覚を表す言葉のように思える。別の感覚を一言で表せば、
『艶』である。そして、「雪時雨」は季語であると同時に、その句を支配して読み手を魅了する言葉でもあると思う。言うまでもなく筆者もその一人なのである。

さて、この俳句の情景は、狭い道を傘を差した二人が行き交う時の「江戸仕草」を詠んだものであるが、其処に「時雨」とは明らかに違う情趣が介在している。擦れ違った二人に、次なる場面が展開する、ぜひそうなって欲しいという筆者の希望を、別の俳句で示してくれることを作者に託したい。

格子戸の奥の暗さや春浅し 岡田宣子

格子戸と言うとすぐ京都を思い浮かべ、過去に京の町並を散策した時の想い出に浸っている。この俳句は、京都に限らず、今でも地方都市に残っている格子戸のある古い町家を想起させるのにぴったりであり、まだ寒さの残っている早春のイメージが、季語の幹旋によって表されている。

蛇足ながら、京都の町家の格子戸について勉強したことを紹介すると、まず格子の構造として、出格子と平格子があり、次に、格子の形状として、親子格子・切子格子・板子格子・細目格子・目坂格子がある。そして、格子の形や様式が店の職業を表していたそうで、糸屋格子・酒屋格子・米屋格子・麩屋格子・炭屋格子・仕舞屋格子があると言う。実に美観と

合理性を兼ね備えたものであり、日本文化の一つだと思う。

篝火に出陣めくや初詣 寺町知子

この句の篝火は、さいたま市浦和区本太四丁目にある神社、本太氷川神社＝元府趾氷川神社（創建は奈良時代）で元旦に焚かれるものである。大晦日の午後から町会の有志が準備するが、まず鉄製の籠を二基組み立て、薪を用意して夜を待つ。除夜の鐘が鳴る頃から初詣の人が続々と境内に集まり、篝火が威勢良く燃え上がる。まさに、神前に必勝祈願の祈りを捧げて戦場へ赴く将兵の出陣光景そのものである。

作者と筆者の住まいは徒歩二十分ほどの距離で、初詣をする神社が同じである。句を読んですぐに判った。

月おぼろ黒子をかくす舞扇 飯田忠男

隴月にけぶる庭に面した料亭の座敷で、今人氣を博している舞妓が踊を披露しているが、右の目尻に黒子がある。黒子占いによると、この位置に黒子のある人は、性格が明るく社交的で、冒険心や好奇心が旺盛とのこと。年齢は十七、八か。笑顔が素敵で周囲からの信頼が厚い。♪月はおぼろに東山霞む夜毎のかがり火に 夢もいざよう紅ざくら しのお思いを振袖に 祇園恋しやだらりの帯よ♪。姐さん芸妓の弾く三味にのって舞う「祇園小唄」。「東山」へ向けた扇を返した時、

トレードマークの黒子が隠れ、何とも艶のある舞姿となった。踊り終えた舞妓が、畳んだ扇を前に置き、客に三つ指をついて深々とお辞儀をすると、割れんばかりの大喝采の拍手が鳴り響いた。

今日もまた方向音痴春の昼 丸屋詠子

「方向音痴」は、「正しい音程の判らない人」に喩えて、「道を間違え易い人」のことを表す言葉であるが、実生活において、その事で驚くほどの人に出会うことがある。

「今日もまた」と言うからには、相当ひどいのであろう。自分の住んでいる町なのに、帰り道が判らなくなった。

春の日や小さき手を這ふだんこむし 播磨 進

多くの人が体験している幼少時代の団子虫遊びである。大人になってからは気持ち悪い虫であるが、子供の頃はそのような気持ちにはならず、親友のような存在感であった。

幼児が自分の掌に団子虫を載せて、もぞもぞと歩く姿に見入っている。春の日の明るい日射しが、幼児と団子虫との団欒を優しく見守っている。

救世観音宝珠持つ手の冴返る 霜多光代

法隆寺夢殿の秘仏である国宝・救世観音菩薩立像の写真を

見ながらこの句が発する敬虔な雰囲気浸っている。残念ながらその実物を拝したことは無いが、聖徳太子等身の御影と言われる莊嚴かつ優美なお姿に感動を覚えた。宝珠を持つ手に焦点を当てたことで、季節感を確り切り取ることが出来た。

春の燈のこぼるる庭に白い椅子 阿部幸代

日中に庭の景色を眺めたり、読書をしながら午後の紅茶を楽しむんだりする椅子であろうか。白い椅子なのが実にお洒落で、その椅子に座る人の人物像が浮かんでくる。夜になって、大きなガラス戸を透した春の燈が、その椅子を柔らかく包み込んでいる。もしかすると、その椅子の愛好者は、もうこの世に居ないのかも知れない。

梵鐘の余韻煙るや雪時雨 倉田星歩

都会では釣鐘の音に縁遠くなった昨今なので、朝夕に梵鐘の余韻に浸ることが出来るのは、まことに幸せなことである。ましてや、雪混じりの時雨が降っている時刻ともなれば、その趣は格段に増してくるだろう。

湯の町にとこや三軒山笑ふ 森下山菜

「湯の町」から、昭和二十三年に発表された近江俊郎の歌「湯の町エレジー」に直結してしまった。決して広くはない温泉町に、何で床屋が三軒もあるのか理解出来ないが、実際にそ

のような町が有りそうに思わせるのがこの俳句の技であろう。季語の斡旋も然る事ながら、「とこや」と平仮名書きしたところにも作者の狙いがあると見た。

春の夜や下弦の月の照らす宴 反町 修

下弦の月Ⅱ下つ弓張であることから、三月か四月の下旬に屋外で開かれている宴を想像した。其処に桜が介在しているようにも思える。三月なら南国、四月なら北国か。皓々たる月夜でないところが洪くて佳い。

春の浜那由他の砂に聞く先史 皆川 更穂

梵語である那由他は想像を絶する数であるから、浜辺の砂にその語を当てたこの俳句に納得した。「先史」すなわち、旧石器時代や縄文時代の人間の暮し振りを、知っているであろう砂に訊いてみたいという儂い願望なのである。

木綿針曲がりたるまま針供養 元田 亮一

関西や西日本では十二月八日に行われる針供養であるが、東京や関東では二月八日に行われる。和歌山市加太の淡島神社がその起源とされていて、東京では、浅草の淡島神社で行われることが多い。縫い針の他、待針やミシン針、畳針まで供養される。木綿を縫うのに使う太い針。厚い布地を縫ったのであろう、その様子がよく書かれている。

薔薇の芽の数をかぞへて登校す 篠崎 紀子

薔薇にはいろいろと種類があり、早春に芽吹く芽も様々で、どんな花が咲くのか楽しみである。作者のお孫さんのことであろうか、それとも、作者自身の昔の姿を現在に置き換えて詠んだのか。何れにせよ、開花の時季を心待ちにしている様子がよく書かれている。

春を待つ五百羅漢に小糠雨 池田 珪子

川越の五百羅漢が眼に飛び込んでくる。一つ一つが皆違うと言うから実に愉しい。自分に似た羅漢さんも居るのだろう。好天の日の方が良いのは当然だが、人の少ない小糠雨の日に、恋人同士が相笠で巡るのも一興であろう。

「トロイカ」を歌うて血潮満つる春 山岸 久美子

現在八十代の人たちが、その昔、歌声喫茶で合唱した歌の一つがロシア民謡の「トロイカ」であった。筆者の手許にある懐メロ歌集を繙きその歌詞を読んでみて、たしかに元氣の出る歌であることを再確認した。

作者は、春を迎えた日の庭で、両手を広げて胸を張り、朗々と「トロイカ」を独唱したのである。まだ余寒を感じる候であるが、身体が次第に熱くなってきた、五体の隅々まで、脈々と血潮が満ちて行くのを実感した。

水琴窟

(水明集三月号鑑賞)

池田雅夫

大波のうねり果てなし冬の海

山崎郁子

「冬の海」は波が高く荒々しい。とくに日本海は雪雲に被われて暗い。晴れた日でも大きくうねり、鉛色をして寒々しい。大陸からの季節風が吹きつける若狭のあたりも例外ではない。「大波のうねり果てなし」にその厳しさが表れている。それをじっと堪える暮らしの強さに敬意を表する。

花吹雪 山懐の無人駅

香田裕誌

「桜前線」は次第に北上し北海道までたどりつく。また、標高の高い山間は平地に遅れて開花する。山深いローカル線の「無人駅」。利用する客は日に数人。そんな鄙びた駅の桜が満開になり「花吹雪」の真つ盛り。桜の名所でなくても、こうした桜は各地に存在する。住人にはそこが名所なのだ。

ゆく途に富士塚あまた神の旅

新井のり子

「富士塚」は富士講の人たちが富士山に模して築いた塚で、江戸時代に江戸やその近くで多く造られた。そこに登ると富士山を拜むことができるのである。「神の旅」は、諸国の神々が出雲の国へ旅立たれること。途中の休み処であろうか。

絶景を股のぞきする冬うらら

木谷葉子

「股のぞき」で有名な「天橋立」。日本三景の一つである。文珠山山上から一望の天橋立は宮津湾の砂州で、天に舞う龍のように見えることから「飛龍観」とも呼ばれている。おだやかな冬の一日に誘われて観測所に登って来た。そして、その「絶景」に見蕩れながら股のぞきを滑稽に楽しんでいる。

山茶花や夜道に浮かぶ白さかな

播磨 進

「山茶花」の自生種は白花であるが、園芸種に赤やピンクなど種類が多い。椿とちがい、花びらがばらばらに散る。山茶花が満開の「夜道」。ほの暗い街灯に真白く咲いて際立っている。あるいは散り始めていて道を白く浮かせているのかも知れない。「山茶花の」として詠嘆を集中させたい。

氷片を睨む秋刀魚の黒目かな

阿部貞代

近年、「秋刀魚」の不漁が暮らしに影響している。それはさておき、店頭に陳列された秋刀魚。鮮度のよしあしは、その目で判断するという。かち割氷にのせられた秋刀魚の「黒目」は「氷片を睨む」かのように活き活きと輝いていた。

背伸びして天辺に星聖夜かな

横山礼子

家族でクリスマススイブを祝っているのだろう。クリスマスツリーに豆電球を連ねて点滅させたり、色紙で作った飾りを吊したり、子供たちの仕事も楽しみである。「背伸びして天辺に星」であるから下五は「聖樹かな」が適うように思う。

餌を探す水鳥 長き首傾げ

伊藤美津子

「水鳥」で「長き首」なのは白鳥、白鷺、青鷺などである。白鳥は秋、主に千島列島を経由して北海道に渡ってくる。大鷺は冬鳥として渡来し越冬する。河川や池、湿地などで立ち止まり、ゆっくり「餌を探す」。見ている側も気が長い。

新妻の慣れぬ手付や年越しそば

嶋田洋子

結婚して初めての年末。そこで「年越しそば」を作って食べることにした。「新妻の慣れぬ手付や」に初初しさを感じる。そばを茹で、天ぷらを揚げているのだろう。そのひとつひとつに味わいがある。それが手打ちそばなら、また格別。

かくれんぼ 潜む毛布の寝息かな

鈴木香音子

無邪気な句に心がなごむ。幼い兄弟であろう。「かくれんぼ」に押し入れは恰好の隠れ場所。毛布の中にしばらく隠れていたが、見つかる前に眠ってしまった。みな経験がある。

銀色の飛行機飲み込む鰯雲

深沢りこ

高層の空に現れる「鰯雲」。秋の雲の代表的な雲で、小さな白雲が魚の鱗のように群れて、鰯や鯖の背の斑紋のように見える。そこへ「銀色」に輝く「飛行機」が飛び込むように消えていった。「銀色の飛行機飲み込む」に臨場感がある。

深閑の森に柏手神の留守

柳父はる

陰暦の九月末日、全国の神々は神渡の風に乗って出雲に集まるので、諸国の社は神が居なくなる。それを「神の留守」という。「深閑の森」の厳かさに、神が不在ではあるが「柏手」を打たずにはいられない。信心深い氣質がそこにある。

学舎に朝日差し込む冬の朝

三森恵子

冬の日差しは低く斜めに部屋の中まで差し込んでくる。早朝の教室に、まだ誰もいない。ひっそりとした教室の明るさに、元気な児童の様子や授業を想像する。「朝日差し込む十二月」として、「冬の朝」を言い換えてみてはいかがか。

六地藏供花の乾びしそぞろ寒

山下ユリ子

むかし話の「笠地藏」を思い浮かべる。そこに供えられている花が「乾び」て枯れている。なんとも憐れに思えたのだろう。「六地藏の供花乾びし」として中七の字余りを解消。

大村節代 選

鼓
笛
集

朝東風や絵馬の小径はからからと
多宝塔片側だけの春の雪
話好きな僧に道問ふ春の雪

菅原真理

こんな日はポピンズが来る春の風
若草や笑ひ転げる娘たち
リラ咲くや赤毛のアンは夢を見る
黒き家ミモザゆつさゆつさと誰招く
背伸びしてときめきを待つ桜草
フリージア色と匂ひで部屋充たす

小林京子

畑宮栄子

深閑と鎮守の杜に春の雪
改札を出て春光の雑踏に
カーナビに探す抜け道混む彼岸

岡田宣子

公園の遊具塗り立て風光る
朝寝して万歩計もつ老後かな
連れ立ちて声の弾むや春休み

加藤でん治

蒸気機関車いきなりさけぶ朝霞
山笑ふ西郷さんに鳥の糞
玻璃越しに大海原と梅林と

本橋稀香

濡れ縁にひとり蛙の目借時
マンホールの蓋四角くて四月馬鹿
春耕の天地返しを我もかな

飯田忠男

ランデブー惑く惑くしてる春の宵
時惜しみ満貫振り込む春の宵
春の宵犬寝そべりて店を張る

北山建治郎

白梅や袂へ神籤仕舞ふ僧
内裏雖ほほゑみ続け半世紀
雛の夜縁なき我が家静かなり

佐々木史女

蓬餅香氣甘味乃玉手箱
薫風に球場皆シャツは青
川風のかすかに伝ふ祭笛

秋谷風舎

鼓笛集作品評

大村 節 代

別れ路の払ふも落ちぬぼたん雪
雨霰ひき見る見世出し春の雷
ランドセルぴかぴかだもん春の雷

杉浦千祐

話好きな僧に道問ふ春の雪

菅原真理

啓蟄の入居施設の明かりかな
春の暮祖母は渋渋餉を残す
春雨や祖母は苺を三つ食ふ

吉川拓真

粥を炊く土鍋ほつほつ入彼岸
白酒に初恋知らぬ頬を染め
春一番ヤクルトさんを連れてくる

遠藤人美

雛あられ米一粒を愛づるなり
御雛様一緒に並ぶすまし猫
我が学校河豚鍋囲み声弾む

小駒さち子

春疾風岸辺の供花の流さるる
白木蓮の花落ちて沼静まれり
花束の配達忙し卒業の日

横山礼子

松島の遊覧船や片時雨
亡き夫の郷の雑煮を半世紀
冴返る命的中の弓の音

武田重子

黒い家には、もしかして魔法使いが住んでいるのかと思つた。しかし、ミモザの黄色の花の中七で、急にモダンな景になった。モガ、モボを客に配すと良いかなと、勝手に客にした。

こんな日はポピンズが来る春の風

小林京子

俳句は乙女にも老女にも自由自在に変身出来る。そして過去にも未来にも…。

作者の三句は、少女だった頃に多くの人が通過した洗礼のような思いを、現在に引き寄せて、上手に表現されている。

黒き家ミモザゆつさゆつさと誰招く

畑宮栄子

鼓笛集巻頭（四月号）

私の好きな一句（自句自解）

反町 修

梅林や幟はためく陶器市

今年も大宮第二公園の梅林で梅まつりが開催され、併行して横の駐車場で陶器市が開かれました。満開の梅林から仄かな匂いが漂い多数の見物人が訪れていました。全国の産地から陶磁器が出品され、産地名を染め抜いた幟が売場毎にたてられていました。

自宅近くで行われる梅まつりと陶器市を毎年楽しみしています。

訃報

季音雪欄作家

由良ゆら女様

お病氣にて、去る四月七日ご逝去されました。

水明通信

何の役にも立たんですが

寺内洋子

図書館で「なにわ人情謎解き帖」という本を見つけ、「なにわ」に引かれて借りてきた。江戸時代末期の大坂の若い同心が主人公。その中に次の一文があったので披露。

「どこぞのアホが鯖の尾盗みくさったんや」

「鯖の尾で、みをつくしの事ですか？」

「せや、今の若い人にはみをつくしの方が通りがええか」という会話のあとに「みをつくし」の語源が書いてあった。

海へと続く木津川、安治川に立つ航路標識で「水乎都久志」と書き記されることもあった。

（み）は水尾で水脈を意味し、（へくし）は串で杭という意味となる。また身を尽くし、という言葉に掛けて万葉集や古今集などの恋歌の材にもされた。

水明大阪句会から滞つくし句会に名前を変更したときは「みをつくし」にこんな深い意味があるなど思ってもみなかったが、こんな一文を読むと、まだ日の浅い名前にもかかわらず愛着が沸く。我が句会の末長く続かんことを。益々繁栄することを祈り願う。（水明未加入者を含め8名です。もっと増えてほしい。せめて私が入会した頃の人数「9名」くらいまでは）

句集喝采

菅原卓郎

◆塚田佳都子「はなかつみ」

東京四季出版

著者略歴 昭和十九年長野県生れ。平成十一年「風鈴」入会。平成十九年「好日」入会。平成二十年「草樹」入会。現代俳句協会会員。横浜俳話会会員。昨の会。

コロナ禍で句会も思う様に開けない時期に溜め置いた作品を中心に纏めた作者渾身の第三句集。日常細かく観察し的確な言葉を用い、表現豊かな句に仕上がっている。

竹林の真つすぐに降る春の雨
五体投げだす菜の花の明るさに
遠浅の眠りにつづく熱帯夜
ほどほどの皺となりけり干大根
緑陰や画布に最後の黒を足す

第三句、寝付けない夜の暑さに遠浅の浜に寄せる波の如く眠りを繰り返す。言い得て妙。第五句、キャンパスに絵の具の「黒」を又塗る。緑陰の深さをうまく表現している。

片減りの墨の馴染みし霜夜かな
折り目なき紙幣出てゆく弥生かな
今年竹群れぬ生き方選びけり
片蔭に寄りて今後を話し合ふ
ちつと見るわたし梟がちらと見る

第三句、人間は弱いもので群れたがる。そこを敢えて群れない生き方を竹にも求めた含蓄の有る一句。第五句、動物は得てして目を合わせてくれない。偶にこちらを垣間見る。生き物の生態を見事に掴んだ秀句である。

◆島 一木「日月耕読」

富岡書房

ギリシャ神話、哲学者、小説の登場人物などを詠み込んだ句が多く、バラエティーに富んだ句が散見される。

アラクネの金糸銀糸や蜘蛛の糸

ふとよぎる駱駝の顔も秋思ふ

反骨の海鼠の口の黙秘権

沈黙のうちに踏まれし踏み絵かな

方舟にのりそこねたる子猫かな

第三句、確かに海鼠の口は固く閉じている。珍味の海鼠腸造りも容易ではなからう。下五の黙秘権の措辞の上手さはお見事。第五句、十二支に猫は入っていないが、方舟にも猫は乗り損ねたのか。猫好きにとっては極めて残念である。

紫陽花やまだ小雨とて傘ささず

世の中をみんな見ている案山子かな

鐘一打 散る気配なき梅の花

行く春と一本道で行きちがふ

隠り沼をまもる御齒黒蜻蛉かな

案山子は目を閉じることはない。常に行き交う人々を眺めて過かしている。正に寡黙な知識人である案山子。全てお見通しである。第三句、寺の鐘が鳴るが梅の花に散る様子はない。春になると梅の花も確りと咲く。春の強さを感じる一句。第四句、行く春をすれ違い様に振り返るが、小走りに駆け去つてゆく姿に幾許かの寂しさを感じる。もうすぐ灼熱の夏が始まる。地球温暖化の厳しい現実を直視せねば。

網野月を選

山紫集

薄氷の水にならむとする光

石川理恵

薄氷のすき間くちばし入れて飲む

湯浅 和

生と死に境有りしか薄氷

瀬戸雄二郎

薄氷や口にのど飴転がせて

石関六弦

薄氷の上にのりたる白き鳩

反町 修

薄氷や風の指紋を留めをり

丸山マシミ

薄氷や母子の覗くこぶし沼

元田亮一

踏まぬまま春の水をそのままに

丸屋詠子

薄氷をタップダンスの如く踏む

笹本啓子

薄氷や富山銘菓をひと欠片

原田秀子

薄氷や礼節失くす人の増え

畑宮栄子

薄氷踏みつけられし割れた恋

樋口元美

薄氷の花が咲きけり犬が通る

日高道を

薄氷を踏むお転婆の真骨頂

檜鼻ことは

自転車に轢かれ流れる薄氷

福田千春

風神が走り薄氷割りにけり

保坂翔太

薄氷に縋りつきたる塵芥

曲淵徹雄

——以上特選

うすらひに透けし夜前の落としもの

正木萬蝶

甕池の薄氷つつく尾長二羽

山岸久美子

薄氷を揺らす小さな魚の口

松井由紀子

嫋^{たを}やかにしたたかにあれ薄氷よ

山下ユリ子

刈株を離れて行けり薄氷

松宮保人

薄氷を踏んでいきいき登校児

横山君夫

薄氷を踏むや零度の鱗響く

皆川更穂

薄氷や言の重さに耐へきれず

横山礼子

抱きをる紅の花弁薄氷

宮崎チアキ

薄氷や死後の世界のオフィーリア

吉川拓真

跨線橋朝の目覚めや春水

持永喜夫

薄氷の心解けゆく恋の夢

綿引まりこ

薄氷を踏めば幾何学にはたづみ

本橋稀香

薄氷せいぜい地雷踏まぬよに

青木鶴城

薄氷や石置くだけの鳥の墓

森 和子

一片の薄氷過ぐる疎水かな

秋谷風舍

水甕に一夜のうちに薄氷

森川義子

薄氷や微かに動く鯉の紅

新 暦文

薄氷のカシャと単身赴任の靴

森下山菜

薄氷を見送る庭の足音よ

阿部幸代

薄氷に赤き花びら三つほど

森下美智枝

試験日や薄氷踏まず登校す

荒井俱子

うすらひに昨夜の飯粒光りをり

森美枝子

薄氷踏み分けナイキ駆けゆくか

新井のり子

薄氷を避けつつ黙の小学生

飯田忠男

薄氷を目掛けて走る子等二人

上戸千津子

しのめの踏みて気の付く薄氷

池田珪子

薄氷や勇気ためされ命がけ

川島夕峰

薄氷に鼻近づくる盲導犬

池田雅夫

微妙に揺るる女心よ薄氷

熊倉千重子

薄氷や助走たをやかピンヒール

石田慶子

蹲踞の薄氷突く猫まかな

倉田星歩

薄氷の轍のごとし頬紅し

糸井しるく

薄氷をさけて細道けんけんば

河野はるみ

薄氷をびしびし踏んでドレミファソ

井上玲子

薄氷の無き処へと池の鯉

小駒さち子

薄氷タクトのやうに小枝振る

内田恵子

うすらひのとけて濁りと交はれり

小林京子

薄氷の罅修復されてゆく四更

梅澤輝翠

母の眼に涙ありしや薄氷

小山あつ子

薄氷も恋もうたかた煌めけり

梅澤佐江

理科クラブ薄氷越しに観る地球

近藤徹平

消えかかる刹那きらりと薄氷

大場順子

薄氷や底まで透けし用水路

佐々木史女

バス停の踏まれ飛び散る薄氷

岡田宣子

薄氷にとちこめられる柄杓かな

榊原聰子

薄氷や曙光差せば離岸せり

加藤でん治

外流し薄氷揺るぎ余白かな

篠原さよ子

うすらひや空に真白き飛行機雲

渋谷きいち

薄氷や地蔵の辻は渋滞す

高橋満耶子

薄氷をひよいと飛び越ゆ老いし犬

嶋田洋子

朝刊のポストに滴薄氷

武田重子

薄氷にふはりと落つる鳥の羽

清水桂子

薄氷を見つけて遊ぶ子供達

田中章嘉

この辺り路地の変はらず薄氷

下川光子

朝日浴び薄氷ふつと流れけり

寺町知子

薄氷の落葉の透くるにはたづみ

霜多光代

出会ひなどうに忘れむ薄氷

飛永 鼓

薄氷を分かつ舳先の漁舟

菅原卓郎

石地藏祈る杓に薄氷

南條さわゑ

薄氷のほどけぬ内の旅立ちよ

菅原真理

青空に翳す薄氷下校の田

西幅公子

赤き実は風に遊ぶや薄氷

杉浦千祐

薄氷地底を覗く万華鏡

野口和子

始業ベル鳴つて未練の薄氷

鈴木藻好

薄氷やじつと動かぬ池の鯉

野村美子

薄氷に頼りなき歩の鳥の列

鈴木玲子

薄青き薄氷庭の潦

関谷多美子

五の段がやうやく云へて春氷

染谷風子

山紫集作品評

網野月を

生と死に境有りしか薄氷

瀬戸雄二郎

高僧の言辭にも似ている。彼岸と此岸に「境」があったとしても其れは「薄氷」ほどのものであらう、というのである。そしていつしか融けてなくなってしまうものでもある、というような至言として筆者は読み取ってみたい。

薄氷や口にのど飴転がせて

石関六弦

薄氷の水にならむとする光
石川理恵
理屈で読んではいけない句なのである。理屈で読んでしまえば、「光」の熱量が「薄氷」を融かすと解釈することが出来る。句中の二つの主体「薄氷」と「光」の関係性を云々すること読み手は句に込めようとした作者の心持ちを探るのであらう。決して自然科学的な関係性ではなくて、それは喩えの世界である。古来、喩えの世界こそが詩の本流と考えている文学研究者は多いのである。言ってみれば「薄氷」も「光」も擬人法的に解すると味わいが深まるように筆者は考える。

薄氷のすき間くちばし入れて飲む

湯浅 和

「くちばし」とあるからには鳥の仲間でもあらうか。中七座五の措辞で作者の詠んだ世界観のすべてが伝わってくる。一つの景から視覚的な情報を選択して、いや不要なものを削ぎ落して、俳句的叙述に成功している。作者の小動物への慈しみの視線を感じることができる。

何時になく「のど飴」を舐めるチャンスがあった。貰ったのだらう。至極懐かしい感覚が蘇ってきて、眼前の「薄氷」に気が付いたのである。味わいは子供の頃の記憶を呼び起こす。そんなストーリーを作って読み手はこの句に接するのではないだらうか。

上五の季語「薄氷」も「のど飴」も実際にそこに在るものであって、その実存感がこの句の命である。だからこそ読者にストーリーを作る余裕が生まれるのである。「のど飴」は体の中にある感覚で作者の存在を句中に明らかにしている。

「薄氷」は作者の立ち位置を暗示することになっている。噛まずに丁寧に舐めると口中の「のど飴」が薄々として、「薄氷」のような錯覚に陥る。ストーリーの続きがまたもや動き出す。

もちろん切っ掛けは例年のように市販のタブレットを買って、春先の喉のケアをしているという可能性が大なのであるが。

薄氷の上のにのりたる白き鳩

反町 修

この句も上五の季語「薄氷」と座五の「白き場」が実存している。前句と異なるところは、一つの景の中に二物が存在していることである。そこに一体感のある句が成立したのである。一景の中の二つの主体は、叙述しようとする景の構図を決定して、動かせない程の盤石さを有している。

薄氷や風の指紋を留めをり

丸山マスミ

何ともファンタジックな句である。「風」に「指紋」を持たせるとい言わば擬人化に拠って、ファンタジーの深みを増すことに成功している。上五の切れ字「……や」は転換ではなくて、ある意味で句中の主語の呈示であろう。

薄氷や母子の覗くこぶし沼

元田亮一

「こぶし沼」は固有名詞なのか、辛夷の花で有名な名勝にある「沼」なのか筆者には正確なところは分からない。が、辛夷の花の映っている沼、と勝手に解釈した。

「母子」の視線の先、その「こぶし沼」の水面に映っている辛夷の花の脇に僅かに残る「薄氷」は「母子」に発見されたことに拠って、その存在が確認されたのである。

「母子」間の細やかな情愛を感じる句になっている。

踏まぬまま春の水をそのままに

丸屋詠子

作者は「まま」と平仮名書きにして「儘」「随」とはしなかった。「まま」のルフランというよりは、押韻の句になっているだろう。疑問は、自分の行為なのか、誰かの行為を見

てのことなのかということである。元来句中に主語の無い場合は、作者自身のこととして読むのが常套である。この句もそのように解釈した。ということとは「春の水」を傷つけなかった作者の恬淡とした心持ちを読み取るべきであろう。

薄氷をタップダンスの如く踏む

笹本啓子

「タップダンスの如く踏む」とはどのような踏み方なのであろう。想像してみるのだが、なかなかその景を思い浮かべるところまでは行き付けない。筆者もその様子を見てみたいものである。そして「踏む」ことの主語は誰なのであろう。作者ご自身の行為なのか、誰かの仕草を見ての作句なのか、句からは分からない。前句とは異なり、この句は確定が難しいようである。筆者が推測するところは、多分この景の行為者は子供ではないだろう。「薄氷」を子供に踏ませる景を詠む句は散見するのだが、この句の場合、ハイティーンか、アダルトな行為者ではないだろうか。そうした想像から小粋な景なのであろうと想像が広がった。

薄氷や富山銘菓をひと欠片

原田秀子

真つ先に「金こはく銀こはく」を思い浮かべた。加賀藩御用菓子司「森八」の銘菓である。ただ「富山」とあるからには薄氷本舗五郎丸屋の「薄氷（うすごおり）」であろう。作者は茶道を嗜んでいらつしやるのであろうか。表現は直截的に過ぎるかも知れないが、童心に帰ったようなこの表現は、心を打つものがある。

春の吟行会の記



青木鶴城

前日が冷たい雨で、心配された天気でしたが、当日は矢張り水明晴れで絶好の吟行日和となった三月三十日、東京本所のビッグシップに於いて春の吟行会が開催されました。

参加者五十名が続々と集まり、受付を済ませた後三々五々吟行へと向かい嘯目による俳句と共に帰還、全百句が投句されました。

主担当の第二例会に用意頂いた、とても美味しい昼食のビーフカレーを頂いた後、小林京子氏の司会で開会、主宰、山中みどり第二例会幹事の挨拶を頂き、初参加の七名の自己紹介と続き披講へと進みました。(披講は日高道を、菅原卓郎の両氏)

主宰詠

総帆を張らば桜へ模型船
佳き町本所さくらの道を影二つ

三極(天・地・人)

主宰選

天

糸柳船宿へ入る割烹着

地

花冷の墨田に今も珠算塾

人

一筆の崩し字めくや花筏

超特選

叶ふならも一度君と花見酒
満開となりて饒舌老桜

むせかへるほどのパンジー空襲を知らず

新郎新婦花満開の墨堤に

花冷えに襟足隠し急ぎ足

桜の下しばし鬼平役となり

町角に小唄教室木瓜の花

特選

初ざくら本所で出合ふ江戸ことは

花冷や湯屋が開くのは午後三時

花冷の本所見つむる地藏尊

初顔多しビッグシップは春たがは開

慰霊堂抱く桜の天翔ける

明暦の振袖ちらり花の冷

花の錦これ北斎の筆見たし

しろがねの旗艦曳つばる花をんな

花冷えの戦災の街静もれり

玻璃屋根を飾る花屑屋形船

烈公の泪か桜一二片

墨堤に偲ぶ江都や花の雲

産土の光のどけし木歩の碑

春愁ひ孤高の亀の伸ばす首

慶子

峰雄

妙子

翔太

夕峰

隆文

延昭

道を

夏野

京子

月を

いちい

更穂

亮一

卓郎

微雄

春の大川どのアングルも名画なり
春シヨール駒形橋は空の色
大川の風に揺蕩ふ青柳
將軍も愛でし墨田の桜かな

普通選

今日ありて万葉の花のふところに
水上バスのゐる水面や橋のどか
桜見学ガイドの手には翻訳機
厩橋渡り桜の隅田川
花疲れ外つ国びとに囲まれて
屋形船浮かぶ隅田の江戸桜
本所駒形露地にまひちる江戸桜
池の水温みて塔の先映す
隅田川朝寝食る屋形船
さくらさくら此の先いくつ会ひ別れ
墨堤や桜餅屋に人の列
花見船溢れるほどの客乗せて
詩に謡に春らんまんの隅田川
あの雪解甲武信を旅し隅田川
此岸より彼岸までかな隅田川
慰霊堂に安らふ鳩や木の芽時
春うらら水上バイク大しぶき
桜ふる厩橋守る地蔵尊

公子 風子 宣子 鶴城 昇 卓郎 樂 亜弥子 萬蝶 はるみ 千春 ひろこ 修 喜恵 美どり 美智枝 山岸久美子 公子 士史 マスミ 洋子 輝翠

庭園の春切りとりて吟行す
隅田川行き交ふ人に注ぐ春
迷ひ道阿咩像見つけ春の昼
花盛スカイツリーを包み込み
甲羅干す亀の親子や池温む
花人の往来絶えぬ吾妻橋
花曇り復興の碑の煤けをり
ビル風の抱くや花片渦巻きて
老木の花いとほしむ八十路かな
花見して鳥の立ち寄る渡し跡
江戸桜本所ほのぼの染むるかな
水上バイク飛ばす飛沫や風光る
花冷えや亡き母に似し人に会ふ
花曇り水上ジェット波しぶき
新人は未知への挑み銀杏の芽
桜舞ふ隅田の空に鐘嚙子
鼻先に産毛そよぐや春の鳩
屋形船川面ゆらして揃ひぶみ
花衣傭ふ傭は二人掛け
花待ちて視線交はる船と土手
花散りて隅田は流れ捷めけり
春うらら手書きポップの佃煮屋
汲む前に千鳥足なり花むしろ

恵子 進 北出久美子 隆文 サカエ 宣子 知子 星歩 敏江 幸代 京子 真理 葉子 真由美 峰雄 亮一 直子 恵美子 風子 いちい 月を 慶子 翔太

コップ拭く茶髪の花見船
すみだ川水鳥川面にぎはして
花盛り名物俵夫は女子大生
互選及び主宰選の披露の後表彰が行われ、
天・地・人の三極には主宰より色紙、超特選
には短冊が授与され、互選による高得点者には
水明より記念品が贈呈されました。

高得点者

一位 皆川更穂
二位 境延昭
三位 石田慶子
四位 青木鶴城
五位 庭野峰雄
六位 曲淵徹雄
七位 岡田宣子
八位 阿部幸代

表彰の後、主宰より講評を頂き山中みどり
ビックシップ館長の締め挨拶を以て予定の
時刻通りに終了しました。お昼の準備及び桜
餅までご提供いただいた第二例会の皆様有難
うございました。また受賞の皆様おめでとう
ございました。

水明例会



第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

春疾風揺るる江戸文字幟旗
メモ書きに母の人柄種袋
イラストに唆されて花の種
薄霞十七文字に誤字脱字
飯茶碗しの字くの字の白子干
鳥風に掛け字傾ぐる閑居かな
種の名を書き忘れたる種袋

マドンナの文恋を語らず花の種
物種や口に問する目端
帰らばや「字」ある里の入彼岸
花種買ふ曾孫生まるる報ありて
当て字キラキラ孫の名読めず雛祭
種物選ぶ臍白白々と見え隠れ
数字から離れてみたし春の風

喜恵 千祐 由紀子 京子 稀香 卓郎 和子
以上特選

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

種売のあるじ自慢の在来種
貰ひ受け五年持ち越す種袋
日本語に並ぶローマ字春爛漫
春の虹英語弱いがローマ字なら
縁側にバーのマッチと種袋
マジシャンの手の内にある花の種
とりどりの花種選ぶ新居かな
種袋ふれば母の文字をとる

鳥帰る戦無き空目指し行く
花衣小走りに来るテラス席
花冷えや壺に収まる君を抱く
春雷を君の別れと聴きにけり
粋に着る小桜小紋花衣
スニーカー紐をみどりに花衣
娘とのお揃ひなのよ花衣

卓郎 京子 チアキ 和葉 マスミ 喜恵 稀香 和子
慶子 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

花衣裾の刺繍に糸やつれ
花衣隅田の土手をジーンズで
北の空V字飛行の鳥帰る

鳥帰る無事を祈りて姿追ふ
さあ一行こう誰の合図や鳥帰る
鳥帰る帰れぬ民の朝餉かな
大空を迷ふことなく鳥帰る
山菜莢に別れ惜しむや鳥帰る
春愁や細き階段すれ違ふ
闘鶏や拳握りて見る女
手入れする母の手やさし花衣
人集ふ彼岸桜を愛でし午後
花衣着れば今年も生きてゐる
花衣夢二気取つてモボとモガ
鳥帰る物言ひたげな遺影の目
独裁の怖さ知らずや鳥帰る

千春 妙子 亜弥子

竺仙 サカエ 峰雄
以上特選
恵美子 盛稔 江敏 峰雄 竺仙 妙子 亜弥子 千春 慶子 鶴城

鶴城

第三例会（東京）

五明 昇 報
曲淵 徹 雄

料亭の高擧越しの木の芽かな
稜線のたかぶりとなり木の芽吹く
思ひ出の続きを歩く木の芽時
鼻梁美し天領の雛の気位
蒼天へ容ととのへ櫻の芽
木の芽晴墨の香高き結願寺
荒城や木の芽怒濤の外廓

理 恵
雅 夫
康 世
萬 蝶
徹 雄

以上特選

泰然と芽吹きのときを大櫓
しづしづと飾る百年前の雛
東風吹くや颯爽とゆく赤き靴
顔を打つ柔らかき枝雑木の芽
雫してくれなる兆す桜の芽
かの森に眠れる美女や木の芽吹く
木の芽吹く枝のあるへのごそばゆく
春の月寄席の木戸洩る跳ね太鼓
室町に上ル西入ル猫の恋

康 世
理 恵
雅 夫
星 歩
順 子
萬 蝶
千 祐
徹 雄

第四例会（浦和）

石井 喜 報
反町 修

鳶重の本を枕の朝寝かな
調教の人馬一体風光る
風光る色とりどりの熱気球

マ ス ミ
修

至福とは目覚ましの無き朝寝かな
校門くぐる少年の意気風光る
首を振る張子のべこや風光る
風光る大クレーンの大回転

曆 文
翔 太
延 昭

朝寝して窓の雀に囁さるる
ところの半熟卵朝寝して
風光る二尺足らずの躰り口
べか船の舳ふ川緑風光る
鳥の歌伴奏にして朝寝かな
観た夢の続きを更に大朝寝
風光る道化出を待つ商店街
朝寝して朝湯朝飯一人旅
背に余る赤いカバンや風光る
朝寝して遅刻の夢や子らの声
風光る筏流しの水馴れ棹
朝寝して朝酒欲す喉元で
風光るペットボトルを挿すりユック

以上特選
光 子
恵 昭
延 昭
昇

第五例会（浦和）

梅澤 佐江 報
河野はるみ

出船入船まもる岬の黄水仙
ひと光甘き夢連れ春の雷
百咲きて百の明るさ黄水仙
春の雷花壇に目覚め促せり
一陣の風に微笑む黄水仙

はるみ
義 子
玲 子
宣 子

切り岸に揺るる一叢黄水仙
春の雷ささめくやうに去りゆきぬ

佐 江

春雷や蒼き光を投げて去る
満目の黄水仙畑香に酔へり
春雷や寝言の犬の耳の向き
春浅し旅情は水に澄みにけり
黄水仙遥かに白帆沖を行く
春雷の音のとぎれて長湯かな
春の雷父がぼつりと馴初めを
黄水仙あなたと踊る円舞曲

以上特選
はるみ
玲 子
知 子
紀 子
宣 子
義 子
千 祐
佐 江

若松例会（京橋）

正木 萬蝶 報
石田 慶子

鋤くたびに新たな匂ひ春の土
握ればほろとほぐるや春の土
日時計の影めぐりゆく春の土
土恋し能登三陸よ遠からず
抜きし野菜の根に匂ひ立つ春の土
顔を出す命つつみて春の土
菜園のまだ覚めやらぬ春の土
通小町の足跡訪ふも春の土

京 子
詠 子
はるみ
佐 江
千 祐
萬 蝶

塩梅や煮ても焼いてもめじ旨し
逆転のホームスチール春の土
スパイクに溜めて帰りぬ春の土

以上特選
月 を
佐 江
千 祐

お煮染に花菜をそへて宵の宴
春の土そこに在りしかレアース
町並は生まれ変はりて春の土
煮え切らぬ男と臘月夜かな
農事曆に入る朱のメモ春の土
老農夫春の土採み土を嗅ぐ
泥湊んで轍錯綜春の土
煮え切らぬ背憎らしや花見酒
春の土新米ママのベビーカー
諍ひに不毛の理屈春の土
くせつ毛は母の遺伝子ぜんまい煮る

はるみ
ひろこ
詠子
京子
マシミ
稀香
星歩
千祐
慶子
鶴城
萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

引鳥や釣灯籠に灯の入りぬ
彼岸寺みな善人の顔をして
彼岸会や雨やはらかくなりけり
啓蟄や方向音痴は親譲り
友達飾らぬ口調草の餅
去り難し笛の音流る雛まつり
板台でんと昼網桜鯛
夢二画の美女のため息春朧

和子
道子
洋子
満耶子
人美
千津子
早苗

古里の話は尽きず山笑ふ
左党の亡夫にばた餅供へ彼岸かな
啓蟄や金箔のこる馬具出土

以上特選
千津子
洋子
和子

雛の間に入るをためらふ男の子
ばば様の小言のふえて入り彼岸
採寸のSSびたり新社員
啓蟄や亀ごそごと動き出す
啓蟄や帯を解きましょ城の松
粥を炊く土鍋ほつほつ入彼岸
流れゆく雛を見送る幼き瞳
俳句詠みついうとうとと春炬燵
彼岸潮カーネーション抱き逢ひに行く

道子
千枝子
千世子
きわゑ
満耶子
人美
ノルン
早苗

昔話あれこれ46

安子の人柄

安子の普段の気性は誠に寛容で、人々
に対して思いやりがあり、殿上人や女房
身辺に奉仕する人々に対して身分に応じ
て何かと目をかけてやり、他の朋輩の女
御たちとも仲良くし、歌のやり取りなど
風流な交際をしていた。が、美貌の女御
芳子に対しては、嫉妬心を抑えられなか
ったようだ。

兄弟に対して、言うまでもなく。兄
君に対しては親のごとく頼りにし、弟に
たいしては子のように慈しんだ。
帝に対しても良き助言者であった。応

和四年(964)に三十八歳で亡くなった。
その時は、都だけではなく、遠隔地の人々
まで悲しんだ。

為平親王

安子の子の中に、冷泉院の次に東宮に
立つべきと思われていた為平親王がいた
が、弟の守平親王(円融帝)に東宮を先越
された。

為平親王が西宮(源高明)殿の婿であつ
たからであらう。

もし為平親王が即位したら、天下の実
権が西宮殿の一族に移り、源氏が繁栄す
ることになるのを恐れての、師輔の子息
たちの企みであらう。

* この後、『大鏡』本文では、

「いと恐ろしく悲しき御事ども出で
来にしは」とだけあつて安和の変の
ことは具体的には書かれていない。

師輔の子息たち

彼の子息たち十一人の中の五人が太政
大臣を担った。

伊尹・兼通・兼家・為光・公季である。

各地句会



水明澤つくし句会 (大阪)

盲目にi p s細胞浅き春
春來たる大地の色のズック靴
宍道湖の蜆汁出すモーニング
白酒や女同志の愚痴話

水明鬼石句会 (鬼石)

古雛や明治の父の候文
捨て難き母の着物に春の風
菜の花にしたたり落ちる雨しづく

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

春雷にお針の妻の眼が泳ぐ
藪椿落ちて艶めく行者路
この辺り昔は寺領恋の猫
琴の音の零るる路地春の雷
絶筆の細き癖文字白椿

雨下駄の赤き爪皮春しぐれ
春時雨潤み初めたる城下の灯
猪牙舟を舫ひし辺り猫の恋
めだか句会 (浦和)

彼岸明け軒端で哮る三毛の猫
片割れの靴下さがす彼岸かな
彼岸会や叔父の声音に亡父をり
春駒や家族の顔を覚えこみ
彼岸会やいとこ同士の照れ笑ひ
ギャロップの春駒行きて草香る
オンリーワン生くる意味問ふ彼岸かな
九十九里の僅かなうねり彼岸潮
故郷は年毎とほく彼岸過
牧走る春駒風とはしやぎをり

山茶花 (浦和)

通学路辛夷を見上げわいわいと
栈橋を出で行くフェリー風光る

若鮎句会 (浦和)

啓蟄やのらくろ八巻伍阡圓
啓蟄やまた掘り返す大都会
官女雛すまし顔して研競ふ
古雛此の日生まれて逝きし祖母
啓蟄や空の蒼さに後戻り

由美子
俱子
昇

莊志
六弦
尚己
章嘉

和子
道代
月を
はるみ
知子

美江子
マスマ

芳春
稀香
秀子
山菜
香音子

まんさくに息吹きかけし日曜日
息肩の蟻穴を出てボランテア
デパートや喜怒哀楽の雛人形
啓蟄や軽き調べに友集ふ
ミナミ辺りの十一の利息暮れかゐる
啓蟄や風の膨らみ草の香
きざきサークル (浦和)

義仲寺に偲ぶ縁や蜆汁
宿酔や六腑に染むる蜆汁
見晴るかす古刹の覺春の山
永訣や滲んで見ゆる春の山
離乳食の要に一匙蜆汁
春の山鳴いて小牛の立ち上がる
春山や鈍行で行く一人旅
手話交じへふるさと語る春の山

青葉の会 (浦和)

春三月飛鳥の仏像拝む旅
吾子のごとやがて飛び立つ蒲公英よ
名将の銅像の城桜咲く
蒲公英や絮ふはふはと風に乘る
乳ねだる嬰の瞳や鼓草
幼女吹く蒲公英の絮つぎつぎと
たんばの絮が気ままに宙を飛ぶ
青年のブロンズ像や草朧

ひとみ
真
拓真
月を
喜夫

昇
健司
由美子
俱子
啓子
光子
和子

美紗子
真理
美智枝
美子
啓子
公子
洋子
輝翠

あゆみの会 (浦和)

木の芽晴みどり児一步又一步
点描のやうな芽吹きや斜面林
木の芽晴防災ヘリの旋回中
肩並べ母子つれ立つ卒業式
青年が駆け足で行く木の芽道
木の芽風柳広場に蚤の市

神戸大池会 (神戸)

名は知らぬ狭庭に集ふ春の鳥
春日向毛玉取り器の奮闘す

野菊の会 (与野)

「裕次郎」の妙なる低音春愁ひ
種袋振れば母の文字をどる
大股のスニーカー跡下萌ゆる
楽ありて苦もありひとり春の雪
薔薇の芽やまづ結末を読みはじめ
春泥の靴を渋谷のハチ公前

鶴川山百合会 (鶴川)

数寄の庭香を憚りし沈丁花
沈丁花咲かせて本日休診日
沈丁や路地の奥より嬰の声
沈丁花引き戸を開けて母の来る

靖子
俱子
啓子
重子
和

千津子
早苗

美代子
和子
清子
倭子
恵子
光子

雄二郎
史代
広子
由美子

「あの道を来たのね」香る沈丁花
沈丁花が咲いたよ返信無用です
トランプの掻きまはす世界春寒し
沈丁花待ち焦がれつつ香に迷ふ
主なしとて香り変はらず沈丁花

若狭水明会 (若狭)

うねる土手伝ふ野焼の火脚かな
蟠りすっかり消ゆる野焼きかな
雪が舞ふ越後に瞽女の三味流る
野を焼けば炎あばれて竜となり
野を焼くや出し抜けに火は風を呼び

野焼して初心に返る農日記
野焼くや生まるも去ぬも只ひとり
野焼きして近づきたるや豊後富士
野焼跡新たな命生れけり
土手焼きの男一匹仁王立ち
白魚の便り若狭の南川
作付けの思案はつぼつ野焼きする
北川を風の横切る野焼かな

櫻蔭句会 (浦和)

名城の西の櫓へ青き踏む
何か身に満ちくる力青き踏む
青天に子山羊跳ね跳ね青き踏む
蹠に生くるよるこび青き踏む

千春
理恵
美千子
うさぎ
玲子

祥子
昭代
寛久
友夏
郁子

初花
風花
笑風
和風
郁子

美智枝
茂子
公子
由紀子

踏青の果てに岬の風に合ふ
甘やかな風の案内や青き踏む
青き踏むつき上ぐる草強し
時流れ一生駆けぬけ白梅光
引退の馬軽やかに青き踏む
手すさびの三味の音流る春の宵
三月の海の流木しらじらと

小梅の会 (浦和)

麗日や尻ポケットに文庫本
風光る君三十の新天地
文庫本手にしまどろむ春の昼
花咲けど黒船は海見て走る
無器用なをとこ日永を持て余す

円卓の会 (浦和)

梅林や轍はためく陶器市
坂東太郎魚跳ね光る春の水
網繕ふ漁夫の寡黙や百千鳥
春場所や谷町わかす二枚腰
春風や腹出し休む新横綱
ミモザの花のブーケトス青空へ
瀬戸内の舟屋浮き玉干鰯

認知防止の「バスガス爆発」四月馬鹿
春の水喧嘩知らずの小学生
紛争の渦らす涙や飛花落花

行雄
真理
千恵
多美子
美子
久美子
幸代

隆文
恵子
進

道然

修
翔太
輝翠
卓郎
道子
京子
亮一
月を
拓真
鶴城

鶴城

新樹の会 (浦和)

落飾の浮舟勁し雛納
銀ぶらや春爛漫の飾り窓
雪椿風のまぶしき膝小僧
風光る新作競ふ飾り窓
マドンナの残像乙女椿かな
粉飾は貫く覚悟春霞

りそな俳句会 (浦和)

小三治のまくらそろそろ春の宵
聞こえる猫のいびきや春の宵
コロナ禍に心で歌ふ卒業歌
自らの漉きし卒業証書手に
頬杖の妻春宵に身をまかせ

繭の会 (浦和)

意味深やあの微笑みは蜃気楼
しらす漁富士も見えたり隠れたり
議事堂裏より赤坂へ春疾風
「迷犬」の貼り紙にざれ春疾風
遠富士を波の彼方に白魚汲む
春疾風坂道のさき富士聳ゆ
谷あひの無人の駅や春疾風
春疾風袋小路に砂の屑
深呼吸してのぞむガラポン日永かな

風子

修

徹雄

清吉

道城

鶴城

道

久美子

建治郎

マシミ

雅夫

伸子

留美子

和子

小麦

風子

寿夫

風舍

さよ子

夕峰

深草の榻の傷痕春みぞれ
白魚の酢に泳がせて箸の先
春疾風牛は目をあけ反芻す

月を
京子
まりこ

雛の前童謡歌ふ淑女かな
菰外し深呼吸する城の松
三輪山のたをやかなりし麦を踏む

きわゑ
洋子
廸代

雛の会 (浦和)
海鳴つて耳鳴りを消す春岬
地母神の目覚め一氣に春の色
泥団子ベンチに整列春うらら
うららかや砂場いつぱい泥団子
野遊びやかがやくばかり泥の足
先駆けの鶯餅や店明り
泥大島に母の面影水の春

燈女
公子
はるみ
輝翠
喜恵
チアキ
佐江

肅肅と勤行の僧春浅し
なか春の霞のはての白帆かな
幼犬の行きつく先に藪椿
笑ふ山大正池を包みけり
湯治場の女三人山笑ふ
木の芽和京の器によく似合ふ
方言にお手上げの旅山笑ふ
木喰の宿の絶品木の芽和
度忘れ同志話すすまず山笑ふ

税子
仁
美子
富子
文子
あつ子
朋子
裕誌
千重子

野ばらの会 (浦和)
手に馴染むおてだま五つ母子草
秩父嶺のむらさき立ちて春の山
避難所に生まれ変はりや母子草
山神も相好崩し春の山
春嶺やガイドブックのAコース
和歌山水明句会 (和歌山)
雪洞を試しに灯す雛の間
銅像はみな胸を張り春北風
シルバーカー足早にゆく梅林
開院うらら途中で止まる自動ドア
春鹿や育毛剤の効き目なく

栄子
茂子
夏江
秀子
みき子
和子
道子
千枝子
千世子
満耶子

水明熊谷句会 (熊谷)
四月馬鹿上手に嘘をつく日なり
蒲公英の絮がスマホを覗き来る
街角の点字ブロック桜まじ
笑点の大喜利に湧く春の寄席
蒲公英の絮を引き連れ旅一座
剃り上げて法師のつもり四月馬鹿
たんばばや地藏揃ひの涎掛け
血管をたたいて捜す四月馬鹿

道
忠男
栄平
徹郎
卓郎
風子
秀子
茂子

俳句の手ほどき (岩槻)

日本の美学ありけり大石忌
春一日奇術師となるボランティア
大石忌訪ふ菩提寺の昼下り
舞妓ふと赤穂訛に大石忌
奇怪なるピカソの絵画春愁
床の間に香薫き込めて大石忌
天を突く奇岩奇景や山笑ふ
春雷や置き葉やの奇応丸
決起する心はまぶし大石忌
菓子折りの花びらの音大石忌
大石忌朱の大白に伏見酌む
花見小路に提灯ともり大石忌
今もつて語り継がる大石忌
廊渡る衣擦れの音大石忌

蛸 蛸 の 会 (浦和)

延昭 佐江 義平 徹太 翔男 忠子 美子 桂子 久美子 幸代 卓郎 知子 千アキ かつ子 風舎 元美 しろく さち子 秀子 幸子 夏野 ひさの

裏道の匂ふ男や春の宵
垣根なき私道を化粧ふいぬふぐり
津軽富士望み城下は桜とき
若楠句会 (浦和)
幹太しなびきもどりと雪柳
啓蟄や求人広告見てをりぬ
餌皿をつつく鶯おいお茶」
啓蟄の雨の一日を昆虫学
雪柳婆娑と抱へて祖母来たる
雪柳賞状筒を袴女子
皐月の会 (浦和)
はなすみれ友の初めて出す句集
古寺の千社札剥ぐ春疾風
武蔵野に富士の見ゆる日童摘む
亡き友の残せし烟蝶の舞ひ
那須駒に私愛は熟し春一番
春疾風追切り攻むる三歳馬
芽吹句会 (浦和)
入り彼岸同じ家紋に軽く辞儀
軽からぬ母の手鏡星おぼろ
秩父嶺のかなた春星限りなし
落椿波紋広がる神の池
亡き兄の育てし亀の鳴く夕べ
リヤドロの衣紋乱れぬ内裏雛

礼子 月を 宣子 直子 操 風舎 宏治 京子 鶴城 山菜 光代 珪子 曆文 更穂 富子 ひろこ 玲子 千重子 弘子

春風に小紋靡かせコンサート
遊びつつゆるり到着春の星
桜東風黄門様の紋所
ミモザの会 (横浜)
深呼吸赤い椿の気を貰ふ
椿落ちて梵鐘の音に包まるる
死してなほ妖艶なるや椿落つ
急ぎ足にぼたりと紅き椿かな
小流れに身投げする如落椿
椿咲く自己主張の強き白
島椿あんこの胸を灯しをり
白椿唐津の壺に活けるかな
竹林の闇をいや増す落椿
珊瑚の会 (浦和)
たんぽぽの絮も乗客渡し舟
入相の鐘に相寄る春の鴨
自由とは孤独に通じ春の鴨
靴放り出してゐる蒲公英鴨野
距離置きて互ひに無口残り鴨
庭先で国際交流黄たんぽぽ
ゆうゆうと沼を狭しと春の鴨
足音とおもひしが風たんぽぽ野
たんぽぽや手馴れし家事の繰返し
春の鴨静かに暮るる山上湖

久美子 千アキ 道 萬蝶 詠子 美千子 玲子 慶子 栄子 史代 千春 マスミ 昇 恵子 史代 広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 節代

りんどう俳句会 (浦和)

山削り大河へ急ぐ春の水
杭あれば杭に小躍り春の水
定年や山の幸なる独活を採る
雪柳雪なき庭を和ませり
拾ひ読む幸せの記事春の雪
特選を受くる幸せ初桜
春の水掬ひて仰ぐ岩木山
「幸福」行きの切符に日付草薙

若 枝 句 会 (浦和)

谷染むる仰向く群れの片花よ
浮かびては消ゆる面影彼岸かな
目光の揚がる港や桜東風
春秋に先祖に对面彼岸かな
桜東風老母の帽子弄ぶ
朝東風は門出の子らの背に吹けり
波引きて人待ち顔の桜員
たかな俳句会 (川口)

フリルたつぷり母手作りの春の服
満開の花と競へよ春の服
卒業子語る未来の設計図
切り過ぎし前髪似合ふ春の服
鎖骨見せ颯爽と行く春の服
上り鮎やがては敵となる友と

君 夫 順 太 翔 峰 夕 雄 徹 子 風 郎 卓 郎 美 子 泰 子 貞 代 しょうこう みどり 敏 江 義 子 福 美 小 麦 の り 子 鶴 城

柿 の 木 塾 (浦和)

麦飯と目刺がうれし朝の飯
目刺焼く名代の氷見の一夜干し
目刺食む残せし頭いかにせむ
安曇野をゆつくり流る芹の水
目刺食む埴輪の眼孔二つ
頬刺は七輪といふ男の矜持
猷立の一品芹の胡麻まごし
節 代 昇 和 葉 章 嘉 恵 子 かつ 子 和 子

誤植訂正

四月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○二十頁上段

正 祝儀とぶじよんがら酒場春の宵
誤 祝儀とぶじよんがら酒場の春の宵

○七十三頁下段

正 遊び毛を頸に光らせ日向ぼこ
誤 遊び毛を頸に光らせ日向ぼこ

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指 導 者] 網 野 月 を
[作 品] 5 句 [受講料] 1,000 円
[方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記
③ 110 円切手を同封 ④返信用封筒は 不要
⑤締切なしで随時受付

[送 付 先] 網 野 月 を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。「参加申込書」(6月号添付)を使用し、参加費を添えて7月20日(水)までに発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

- 【夏行】 第1日目：令和7年7月29日(火)
第2日目：令和7年7月30日(水)
第3日目：令和7年7月31日(木)
- 【会場】 JR 浦和駅東口「浦和パルコ」9階および10階
浦和コミュニティーセンター
第1日目／第13会議室(10階)
第2日目・第3日目／第15集会室(9階)
- 【参加費】 夏行：各日1,000円

事業部

水明通信

お詫びと反省

染谷風子

水明四月号「水明通信」欄に茂木和子氏が「『瓢』の実と『瓢』の違い」の一文を寄稿されている。水明三月号「雪嶺」欄における私の同氏の句〈瓢の実のひょうひょうと鳴く父こひし〉の解釈の誤りを指摘されたものである。執筆時、私は「瓢の実」という季語を知らず、それと全く別の季語「青瓢」の傍題「瓢」の実、「青瓢筆」と解釈的の外れの鑑賞文を書いてしまった。赤面の至りである。まず、作者に多大なご迷惑をお掛けした事をお詫びするとともに、私の誤りをすぐに「水明」上で明確に指摘下された事に感謝申し上げる次第である。

俳句は十七音の最短詩型文芸である。俳句を解釈する鍵は季語である。自分の知識不足からその基本を誤り、季語の読み違いにより的外れの解釈をした事を深く反省したい。

今後とも「水明俳句会」の先輩諸氏及び句友の皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

風 声

○現代俳句三月号——「百景共吟」欄

山本鬼之介（水明）

紅梅どつと疎林の先が気にかかる

梅林や偶にはゐるぞ花おんち

梅も呆るる解説長き花オタク

白梅の枝垂れに逢うて今日は吉

満天は星の時間に梅の里

○現代俳句三月号——「第一回現代俳句『風を詠む』」欄

風通良き大仏や白子干

秋谷風舎

粥炊いて胸透きとほる梅の白

永野史代

胎の子の心音しかと聴く雨水

大橋廸代

漬物石傾ぎて沈む春の月

西浦千枝子

○くちら（中尾公彦主宰）三月号——「受贈俳誌美術館」欄

容よく箸を使うて雑煮餅

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）三月号——「受贈誌拝見」欄

記念日に贈るマフラー洪好み

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）三・四月号——「他誌拝見」欄

伝統の一戦ここに空つ風

鬼之介

○飴（山本一步主宰）三月号——「受贈誌の一句」欄

匂だけ残して暮るる刈田かな

菅原真理

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和七年三月三十一日現在—

山口 富子	5	口	元田 亮一	1	口
大塚 茂子	5	口	福田 千春	1	口
霜 多光代	10	口	日吉聖弥子	10	口
水野 興二	5	口	正木 萬蝶	1	口
春の吟行会より			石田 慶子	1	口
日高道を	2	口	山中みどり	10	口
小林 京子	1	口	富森 士史	1.35	口
青木 鶴城	2	口	倉田 星歩	5	口
皆川 更穂	1	口	大村 節代	2	口
河野はるみ	1	口	吉川 拓真	2	口
合計	66.35	口			

後記

五月号は恒例の水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞を受賞される方々と雪欄・月欄・花欄へ昇欄される方々の発表です。おめでとうございます。

例年、六賞受賞のお喜びの声を一緒に掲載しておりましたが、新珠賞の選考会の日時が遅くなりましたので、お喜びの声は六月号掲載となりました。

各賞を受賞された方々は、日頃の努力が報われたとお喜びの事と思います。特に新珠賞には、多数の方々が応募され、レベルが高くびつくりしました。しかし、惜しくも新珠賞を逃した方は、来年、再挑戦して頂きたいと思います。

ところで、お米本当に売ってないですね。売っていても高いのにびつくりです。わが家でもずっと頼んでいたお米屋さんが閉店して

しまいました。これも大手スーパーの挟み撃ちにあつたからです。

仕方なく二店ほどに買いに行きましたが、どこも売り切れでパツクの御飯が山積みになっていました。近頃、町からお米屋さん、魚屋さん、八百屋さん等の小売店がなくなつてしまいました。

テレビで韓国帰国帰りの方のスーツケースにお土産はお米がぎっしり曰く「日本では仲々買え無いし、値段も半額だったので、沢山買って来た」との事です。

「コメの値段はこの秋も上がる」との記事が文芸春秋五月号に特集されています。米は日本人の主食なのに先行き暗いですよ。春は氣候不順ですが今年は特にひどいです。地球も喘いでいるのでしようか。皆様にはインフルエンザも流行っているようなので、お気をつけて……。

(節代)

今月のはてな？

癪(つ)る

拳万(げんまん)

那由他(なゆた)

緞通(だんつう)

夕梵(せきぼん)

鯢(はや)

臍(すね)

息肩(そくけん)

蟠(わだかま)り

榻(しじ)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内をお願いします。)

75 74 73 70 50 42 ヶ 41 40 15 頁

水明

令和七年五月号

通巻一一三六号

令和七年五月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区摩西一〇二二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央 美版

季音 雪・月・花

七月号 五月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏 名 (俳 号)

題

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名つかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先 (電話番号)

氏名 (本名)

年齢

歳

きりとりせん

八月号 五月二十五日締切

都・市・町名	氏名(番号)
都市町	

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齡

歲

[illegible]

さ・り・と・り・せ・ん

山
紫
集

八月号 五月二十五日締切

氏
名
(
排
号
)

八月の兼題

「風薫る」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って
使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

水
明
通
信

都市又は府県名	姓並びに俳名
---------	--------

通信欄
(近況・感想などご自由にお書き下さい)[illegible]

送り先 二三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四十一一二 水明 発行所

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

[illegible]

季音抄

山本鬼之介

手に余る天金の書や春寒し
行く春や質屋に坐る招き猫
白極め白の闇なる白椿
字余りのこれも又よし山笑ふ
春しぐれ小さき門灯消す朝
芹つみて指紋のひかり失へり
三月や母の形見の解き衣
「道行」の余情も舞ふや春の雪
切り岸に揺るる一叢黃水仙
蒲公英の絮や若狭に古墳群
樺細工木の芽艶めく角館
重たげな弥生の空を手計りす
伸びやかに仮設校舎の卒業歌
落飾の浮舟勁し雛納
追ひ縋る初蝶友のごとくなり
なで肩の壇のすがたに春の水
微動する岩陰の魚冬終る
犬の顔ほどの残雪庭の隅

十倉和子
鳥羽和風
永野史代
星野和葉
町野広子
茂木和子
森川義子
松井由紀子
梅澤佐江
松宮保人
大場順子
池田雅夫
石川理恵
染谷風子
渋谷さいち
横山君夫
保坂翔太
笹本啓子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄してください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に
鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄してください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

うりずんや「十九の春」の流れくる
春障子明日の式服ある長押
雪時雨傘を傾げてすれちがふ
格子戸の奥の暗さや春浅し
篝火に出陣めくや初詣
月おぼろ黒子をかくす舞扇
今日もまた方向音痴春の昼
春の日や小さき手を這ふだんごむし
救世観音宝珠持つ手の冴返る
春の燈のこぼるる庭に白い椅子
梵鐘の余韻煙るや雪時雨
湯の町にとこや三軒山笑ふ
春の夜や下弦の月の照らす宴
春の浜那由他の砂に聞く先史
木綿針曲がりたるまま針供養
薔薇の芽の数をかぞへて登校す
春を待つ五百羅漢に小糠雨
「トロイカ」を歌うて血潮満つる春

清水桂子
菅原真理
小林京子
岡田宣子
寺町知子
飯田忠男
丸屋詠子
播磨進
霜多光代
阿部幸代
倉田星歩
森下山菜
反町修
皆川更穂
元田亮一
篠崎紀子
池田珪子
山岸久美子

水 明 例 会 案 内	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木林 和京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 明淵 昇雄 徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和七年五月一日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第五号)

定価 一〇〇〇円